
トリプラス エピソード 1

マイシア マルキュリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリプルスズ ハピソード 1

【Zコード】

N1421E

【作者名】

マイシア マルキュリア

【あらすじ】

キミとボクは再びであった、でもその出会いには壮大な過去世が秘められていたのです

君と会うごとに過去が思い出されてゆく、その反面お互いの家庭は危機にさらされます

しかしそれは終わりのようで始まりなのでした

1 - 1 再会の絆 (PROLOGUE)

全てはアイより芽生え

アイにより育まれる

アイは巡り逢い

アイに結ばれる

アイは理^{ノトワコ}

アイは法則^{ノリ}

アイは救済^{スクイ}

アイは尊び

アイは讃え

アイは培い

アイは繋がる

アイの始まりは宇宙なる神^{ソラ}

大いなる宇宙

大宇宙なる神の庭井に

穢れなきアステイの泉

アステイは宇宙のウテルス

大宇宙なる神の御胸に擁かれ

神の御心を宿し安息の眠りから目覚めの時を迎える

ウテルスに宿る双子神

ふたりはひとつに結びあい

ふたりはひとつに紡ぎあう

キミとボクのアイ・プロジェクト

トモミさん・ボクは今ハイウェイを北へ向かって走っています

先ほどハイウエイに架かる虹をひとつ通りぬけ

今ふたつ目の虹を通りぬけようとしています

カララジオから2006年11月20日の月曜日の今日

世界同時に発売されたビートルズのラヴといつアルバムの曲が流れています

なにかキミとの再会と繋がつて意味をなしているような気がするのです

このアルバムをキミにプレゼントしたいけれど

贈ることは叶わないものね・・・

機会があつたら聞いてみてください

ボクも帰つたらすぐに買ってみるつもりです

ハルキ

あなたの瞳に映る虹を心に感じています・・・

今日一日・明日一日とあなたに逢えない日々がとても切なく愛しいものになりました・・・

奥様や子供達はいつものようにあなたをお帰りなさいと迎えられることがでしょう

でも私は・・・

本当はあなたにいつてらつしゃいとお伝えしたいのです

トモ

ボクとひとつ心を分かち合つているキミ

再会のあと離れぬ心を振り切つてあの駅の前で別れるとき

キミの切なさをいたわる言葉にしなかつたのは

ボクが誰よりもそれを知つてゐるから

愛しい人の前で見せてはいけないとこらえるキミの涙は
五月雨のようボクの心に映つていました・・・

さつきメールを送つたとき

キミがセカンドシートに座つてこりと微笑んでいるような気が

していた

虹のリングを越えてラヴが流れているときにキミの薰りがしてゐた

もの

アア・言葉ならぬ「トバがボクの胸を揺さぶる・・・ビートルズのラヴ
なにかを語つて止まない響きがこのアルバムに秘められていくよう
です ハルキ

あなたが伝えてくれた響きに包まれています
私は今もあなたの愛に包まれています トモミ

今もラヴを聞いています

ミユーズ（女神）はキミとボクの過去から未来を
ラヴというアルバムにしてキミと再会したあの日の翌日に現してくれたんだね

アア・キミと別れてからのボクはすっかり以前と変わってしまった
というよりも・今のこの気持ちがボクの本当の気持ちだつたんだ
これほど・これほどにもキミが愛しく・愛しかつたとは
ボクは・・もうキミのことしか想えなくなつてしまつたんだ・・・
・

あれからHピソードを書いています
ビートルズのラヴを聞いていると胸の中に溢れる様に過去の記憶が
甦つてくるのです

出来上がつたらキミに送ります
キミもきっと思い出すことでしょう
キミとボクのあの日からのこと

ハルキ

ハルキさん

今朝はセンターのパーキングから天にも届きそうに広がる白い雲が
見えていました

三本の道のようにも噴水のようにも見えました

今はバスルームでラヴを聴きながらあなたを感じています

あなたの左手をしばらくの間わたしに貸して下さい

あなたの腕に擁かれてタコタコとコラレテいたいのです

ト

トモミせん

白い雲は何かの始まりをあらわしているのではないか
上のぼりはどんな感じでしたか ハルキ

白い雲は青い空の中に広がり繋がつて吸い込まれていくようでした
雲の初めはひとつで根元からみつに分かれていたのです ト
モミ

ひとつは宇宙なる神・みつは宇宙を構成する要素をあらわします
それは理念と法則と救済
過去と現在と未来
神と人としてアイ

キミに読んでほしい

キミヒボクのエピソードを……

遙か遠くの過去のあるときキミヒボクはひとつだった
それはつい昨日のようにも感じられるほど鮮明にボクの魂の片隅に
残っていた

宇宙の中心に存在する世界

そこでは何も不足はなく過ぎたるものもなくふたりは大きな愛に包まれ慈しまれていた

永遠のようにも感じられる時の中でボクはキミを愛しキミはボクを

愛していたんだ

1 - 2 天空の虹 (REALM)

遥か遠い銀河の彼方には神の御国があります
金色に輝く美しいその国には大勢の神に近い存在が暮らしております
した
その隣には龍神様の暮らす白銀シロガネの御国があります

神王と龍王の約によりお互いの国はそれぞれ自由に行き来すこと
が出来ました
平和で友好的な交流が常に行われていたのです

神の国は龍神から授かる火・水・光の恩恵を受けて存在し
神の国では水に琥珀の命を吹きこみ龍神に捧げておりました
それは琥珀の零・龍神の命の源でもありました

神の御国に龍神方が来られるときは
神とおなじ人の姿にその身を変えて訪なわれておりました
あるとき白龍王の使いでひとりの龍神が神の国オトの神殿を訪なつてい
ました

その龍神は真っ白なウロコに琥珀色の瞳を持つ白龍王族で
まだ青年になられたばかりの方でした
その時わたしは湖の岸辺に設えた八角のレストシシラトに身を委ねて水面に
躍るさざなみを見つめていたのです

神殿をあとに回廊を涉る青年がわたしの姿にふと目をとめたのでした
わたしは彼の視線に誘われるよう青年人の顔を見上げたのです

目と目が合つた瞬間に・・・何か閃光のよう^{イザナ}に全身にハシリものを
感じていました

ふたりはまるで時が止まつてしまつたかのように見つめあい
どれだけの時間が過ぎたのかもわからないほどでした
やがて青年はニッコリと微笑んで回廊を渡つてゆきました

わたしはその後ろ姿を追いながら不思議に高鳴る拍動を感じていました

青年が龍神の世界に戻られたあとにわたしは父王に尋ねました
先ほど神殿に参られた方は何処イブロの方でしょうと

父は・あれは白龍族の第一王子でレイというのだよ

今日は後に開かれるアステイナリアの祭りの事についての話合いに
来ていたのだよ・と

その日からわたしの心には青年の琥珀色の瞳が住まい離れなかつた
のです

アステイナリアは年に一度行われる感謝祭です

この日は神族も龍神方もともに宇宙なる神に感謝をあらわしその存
在を喜び讃えあうのでした

今年は神の御国に龍神様方が招待されるのです
きっとそのときに逢える

わたしの胸は高鳴りを抑えることが出来ませんでした・・・・・

アステイナリアの日

その日の国は喚起の渦に包まれておりました

白龍王族の方々は神殿に招かれて・神王族との宴が始まつておりま
した

もちろんあの青年の姿も・・・

でも彼は神王方への社交に忙しくて言葉を交わすことも出来なかつ
たのでした

わたしは視線で彼を追いながらも今日は無理そつとあきらめがちに
宴の席を立ち

湖の岸辺に設えられた八角のレストシックトにゆきました

わたしはレストに身をゆだねて水面にその青年の姿を映していたの
です

そのとき水面を見つめるわたしを後ろから呼ぶ声がしたのです

・リン・・・・と

青年がふと現われたのです

振り向いたわたしの瞳に映つたのはあの微笑む姿でした
わたしが戸惑つているとあなたは風のように傍にきて
わたしを見つめて言つたわ・・・・・

キミに逢いたかった

今日はキミに逢いにきたんだ・と

わたしは戸惑いながらも

どうして・わたしの名前を知つているの・・・と尋ねるとあなたは
キミの父上から聞いたのさ・と・・・・・

ふたりは夕日の煌めく水面を見つめながらひとときを語りあつた
そのときあなたは言つた

瞳があつたあのときからキミのことが忘れられなかつた
キミに逢つてボクの気持ちを話したかったんだ・どうしても
だから内緒でぬけだして来てしまつた
ボクはキミ・のことが・・・・・スキなんだ・・・・・と

リンは・・・・・リンも・・・あなたと瞳をあわせたときから
あなたのことが・忘れられなくて・・・
そう・・・・・リンも・・・・・あなたがスキ・・なのです・・・

わたしはあなたの腕に抱かれてとけるように身を任せていた
当たり前のようにあなたと頬を合わせ田と田を合わせて
そして夕暮れに紅く染まる光の中で・・・キスを・・・・・
その日からあなたとの密やかな恋がはじまつたのです
ふたりは決してあいまえることのない世界にありながらも
深く愛し合つていつたのです

レイがスズカゼを使ってわたしの頬を撫でるのがふたりの秘密のアイズ

リンはそのアイズがあると何をしていても手をとめ足でりも跳ねて
弾るように湖のレストにいつた

・スズカゼが頬を撫でる・

アア・レイ・・・レイ・レイがくる・・・・・

レイはいつもわたしをソラへ連れだしてくれた

一緒にソラを駆け巡るときだけがふたりにとつての真実でした
レストで水面を見つめているリンに後ろからそつと近づいて
そのカイナに抱きあげ白龍のスガタとなつてソラへ 飛び出してゆ
くの

レイはわたしを抱いて息もつけない速さで飛翔する

そして反転して急降下

そのまま湖の水面ミナモに飛び込み水のトンネルを潜り抜け

その跳ね上がる飛沫に虹が現われたわ・・・・・

時には竜巻を起こして

リンを包んで噴水のように押し上げ跳ね上げて

ソラをタコタイヒトヒラ一片の木の葉のように落ちるリンをあなたは後ろからふわりと抱きすくめて・耳にやさしくリンと囁いてクチヅケをしてくれた・・・・・

レイ・あなたはいつも全身全霊でわたしを慈しんでくれた

リンが寒さに震えると温かい息を吹きかけて優しくカイナに抱いてくれた

アツクほてる時には花咲く丘をそよ風のようになびかせながらはこんでくれたわ

レイ

リンはあなたを愛しているの

逢う度に心もカラダもあなたでいっぱい

レイ

あなたと変わらぬアイを誓つたわ

レイ

アイは進化するのね

アイは変わらぬのではなくて育つのに

あなたへのアイはどうまることなく今も膨らみ続けているもの・・・

・

ボクがキミを抱いて銀河を飛び越え星の中を抜けて縦横無尽に飛回ると

キミはお陽様のような笑顔で歓んでくれた

ボクはそんなキミを見るともっと高くさらりとスピードを上げて飛び廻るのだった

星のアタリを抜けてソラの彼方へ

キミの好きなホノホシの砂浜

そして誰も知らない星影の秘密の洞窟

ボクとリンはそこで睦みあつた

何故なら龍族と神族の世界の者は存在する世界が異なりひとつにはなれなかつたから

ボクとキミはタブーを犯していた

でも愛する心はトマラナイ

キミはそのときボクに言ったね

レイ・あなたのセナにわたしをのせて共に宇宙を駆け抜けましょンラ

レイ・あなたの角は気高きアカシ・天を指し示し正義を問う

あなたのたてがみは真白き雪のよう・風にマイユレル白銀の耀き
あなたの蹄は力強く大地を蹴りそのイナナキは天地に轟きわたる
レイ・あなたの姿をみたものは心打たれビザマズクそして心魂をも

ユサブル

あなたの瞳は黒く深い夜の闇

あなたの瞳は昇る朝日に似た氣高き炎

あなたの瞳は夕暮れを彩る宵空の暁

あなたの瞳は碧くタユタウ海の色

あなたの瞳は澪を湛えた朝露の色

あなたの瞳は闇を妖しく照らす赤月の色

レイ・あなたの瞳は七変幻・時と事の現れに変幻する

レイ・あなたがわたしを見つめる時は古から変わらぬ琥珀の蜜色

あなたのセナにユラレル夜は星に跳ね月に跳ねて

遠き過去から永久の未来へ流転の渦をぐぐり抜け光り溢れる神の庭

井へ

レイ・あなたの願いはわたしの望み

あなたのセナにユリユラレ天の宇宙を駆巡る

あなたとならば夢幻の旅路へ

あなたとならば無限の彼方へ

あなたとならば遙か遠き命の果てまでも

あなたのセナにユリユラレ・天の宇宙を駆巡る・・・・・

リンはボクの永遠の女神

キミのすべてをボクは愛する

リンはキヨラで美しい

愛深くケガレなきその心はすべてを癒やしてくれる

リンの声・そのささやきがボクの名を呼ぶ時

ボクは喜びにウチフルエ勇氣とチカラが湧きいざる

リンの瞳のなかにある深い光

キミを正視出来るのはボクだけ

それは同じ輝きを持ち同じ憂いを湛え同じ希望に溢れているから
リンのうつしみ

それはボクとアイあつてひとつに融けあい限りなき世界へと飛翔する

いとしーりん

キミを想つ心はひるがつてゆくばかり・もつとじめることが知らな
いよ

ボクはキミに応えたい・・・・・

何時からかふたりの逢瀬は互いの国にも知れわたつていた
でも誰もとがめだてはしなかつた

それは誰もがその恋を実らぬものと知つていたから・・・
ボクは龍そしてリンは女神だつた

けしてマジワルことのない現実にもはじめはそれでいいと思つていた
しかしあイアエナイその切なさ酷さはボクの身を焦がし胸の内を力
キムシル

ボクは自分の在りのままを恨んだ・・・キミと存在する世界が異なる龍である自分を・・・

そしてあるとき星影の秘密の場所でボクはキミに言つた
リン・・・あの蒼く燃える星に飛び込んでボクとひとつにならう・・・
・と

キミは何も言わずにボクを見つめて・・・ただこくりと頷いた・・・
・

ボクはリンをカイナに抱きしめた

ただ・・・ただ・つよくつよく抱きしめていた・・・

リンの大きな黒い瞳からは煌めく雫が溢れていた

ボクの瞳にも・・・・・リンが震んで見えなくなるほど・・・・

ボクはリンを抱いて蒼碧に燃える太陽のように燃える星に飛び込んだ
まわりからは狂つたあげくのフルマイに見えたことだらう
何故ならその蒼碧に燃える星はその現れの姿を焼きつくすばかりで
はなく

その魂も靈もすべてを焼き尽くしの宇宙から完全消滅するといわ
れていたのです

ボクはリンとひとつになれないのならば自分のすべてを消滅したかつた

リンとひとつになること意外に望みはなかつた

リン・・・キミも同じようにそう思つていたね・・・・・

ボクはキミと融けてひとつになれるることを信じて燃える星に飛び込んだ

レイとリンは燃える蒼碧アオミエニの炎に包まれた

ボクはキミの目を見つめ

キミはボクの目を見つめていた

白龍のボクにしつかりと擁かれ頬を寄せあつて・・・・・

炎は凄まじい轟きを上げてふたりを包みこみ

ふたりの命今まさに消えようとしていた

龍神界や神界のチチハハ達はふたりの結末をいたく嘆き悲しんだのです

その悲しみの声は宇宙シヤウの果てまで轟いたほどがありました・・・・・

そしてその時・レイとリンは宇宙なる神に擁きとられたのです
気がつけばキミとボクは神の御胸アステイの中にいたのです

キミとボクは生まれる前の赤子のようにひとつのお繩の中で融けあつていた

キミとボクは融けあいひとつになつていた

神は望みを叶えられた

キミとボクは命以上のイノチをかけて叶わぬ望みを叶えられた

その時キミとボクはアステイで神に誓つた

やがての日にはどんなことをしてもその恩愛に報いることを・・・・・

・

アステイは神の庭井に建てられている八角の神殿
ガラス張りで窓には風に揺れる白縄のカーテン
部屋の中央に置かれた寝台

穏かな慈しみのときの中でのアイをかわしあつふたり
キミとボクはカイナをアワセ瞳をカワシ

コトノハをカワシ

アイをカワシアツティタ

ボクはリンをカイナに擁き

リンはボクの胸で寛いでいる

ボクはリンの横顔を見つめて引き寄せられるようにキスをした

キミは応えるように唇をあわせてボクの名を呼ぶ

ボクはリンの声に応えてキミの名を呼ぶ

掌はリンの体を撫でさすり肌をすべるように愛撫する

リンは切なそうに身をくねらせてむらにクチビルをつよくあわせて
ゆく

ふたりは平安に満ちていた

リンはボクにその身を委ねて膝の上でタコタコと揺らされている

リンはスズオトを響かせるようなその声で唄を歌っていた

ボクはリンの唄に合わせるように鼓を打ち鳴らし

キミのスズナル唄とボクの鼓は

アステイの神殿に不思議なハーモニーを奏でていた

ボクがまどろむとリンはボクのムネやカイナにキスをして
柔らかく噛んでボクのカラダを愉しんでいた

ボクが目覚めるとムネやカイナにはキミのアカシが残っていたもの

ボクは眠っているリンを抱き寄せてコメカミにキスをした

キミはまどろみから眠たげな目を薄く開けてボクを見つめた

キミはとろけるようにぼくにすべてを委ねていた

ボクはリンがすき・・・と囁くとキミは

リンはレイがすき・・・と優しい笑顔で応えた

ボクはリンをずっとずっと遠い未来の果てまでも愛している・と言
うと

リンは・・・リンはずつとずつと遠い未来の果てまでもレイを愛している・・・と応えた

アイアワセ 紡ぐ双子の物語 宇宙の庭井に響く鈴音

ボクはリンがすき

ボクの心はキミでいっぱい溢れている

ボクはリンがすき

ボクの瞳の奥にはいつもキミが映つて眩いばかり

ボクはリンがすき

ボクの耳にはいつもキミの囁く声が響いている

リンはボクと心も体もふたりでわけあつた

リンはオミナでボクはオノコ

だからふたりはひとつになれる

リン

ボクはあの日の切なさを忘れはしない

キミを愛する心の内をすべて語つたとしても

どうして語りつべせるだろうか

愛するリン

愛しいリン

キミとボクの睦みはそんな想いの果てにある

想う心の深さ大きさは言葉で現わすことなどできはしない

いつかずっとキミだけを見ていられる日がくることを信じる

リン

キミがすき

すきなんだどてもどても

ボクのマインはリンでイッパイ

ずっとキミとひとつになりたかった

リン

ボクはキミを離さない

いつもキミを見つめ
キミとふれあい
コトバをかわし
カイナをあわせて
キミを愛しむ
キミを愛している
愛しているんだ・リン
ボクが愛するのはキミだけ
キミだけなんだ
愛しているよ・・・リン
ボクの心はフルエテイル
キミへのアイにフルエテイル

わたしはレイがすき
あなたの姿をわたしは慈しみました
たとえ報われなくともわたしはあなたに命を預けていました
わたしが愛したのは有りのままのあなた
わたしの恋はあなたを一目見たときからあなたへ一途に真っすぐに
あなたへの想いは果てることなく
あなたはわたしのすべて
リンはあなたを愛しています
あなたはわたし
わたしはわたし
わたしはあなた

レイのすべてを愛するの
琥珀色に輝くその瞳はいつも冒険を夢見る少年のよつ
わたしを見つめる深い瞳
あなたの目に映るものを観てみたい
あなたの手にふれるものを感じてみたい
あなたの吐息あなたの拍動
わたしのすべてはあなたとひとつになりたいのです

レイとリンのアイは時空を超えて
アイは未知の彼方へ
アイは無限の歎びへ
アイは宇宙を駆け巡る
レイとリンは真実のマツタキアイを現わした
今まで誰も知らない宇宙のアイそのものを
人は知らない
まだ誰も知らない
けれども神は知っている
神々も知っている
真のアイの素晴しさを
そのアイを知ったなら世界が変わりすべてが変わるものだから

1・3 天空の虹（イリュール）

それからふたりはアステイを巣立ち
地球から遠い銀河のある星に暮らしていた
そこは飢餓も紛争も天変地変も無い
人々はアイの心のままに平和を実現しているかのようだった
そこではキミは王室の教育を任されて王家の童男童女を導き
ボクは他の星との連合政府の秩序を守る連隊長のような仕事をして
いた

王室の神殿は民に開かれていて出入りは自由だった
民は王を尊崇し王は民を尊んでいた
ボクは王への報告等でいつも王室の神殿に出入りしていたのです
マウルス・アルテシアそのときぼくはそう呼ばれていた
そしてキミはメイシア・マルキュリアだったね

白い神殿の周りの庭にはたくさんのお花園があり湖があった
ボクが神殿を訪なうときは必ずキミに逢いにいったね
ふたりで神殿の花園を散歩したり湖を見に行つた
僕達は歩きながらでもよくキスをしていたね
キミと瞳がふれあうともう引寄せられるかのようにキスを・・・
そんなふたりを星の人々は誰もが知っていた
僕達は星の人々に見守られるなかで
ボクはキミを愛しキミはボクを愛していた
ボクはキミの瞳の奥に神を憶え
キミはボクの瞳の奥に神を観じていた

その星では時空を超えてほかのどの星のどんな所も垣間見ることが
できた
だから僕達は知っていたんだ

多くの嘆き悲しみ苦しみ痛みに苛まれ

また今まさにそなうるつとしている星々が
この宇宙にはまだたくさんあるということを

そしてキミはあの口ボクに言つたね

『それらの星の力にならう・・・』と

でもボクは知つていた

その星の人に転生してゆけば

やがてのうちにその星の風に吹かれ滾われて

たとえ元がどんなに尊い存在であつても

一度ともとに戻れなくなることがあるということを

そしてその事業はアステイで大宇宙のマツタキアイを現わした

ボクとキミにしかできないといふことも

以前からボクはそのことを考えていたんだ

でもボクはキミに言わずにしていた

そんなボクの心を悟つてキミから志願してくれたのだったね

『大丈夫 あなたとなら必ずうまくゆくわ』 そう言つてキミは微笑
でいた

それから僕達は星の王に志願して

神の導きのもと遙か遠く離れたとある銀河の星に生まれた

僕達は地球という星に転生したのです

ボクとキミは地上世界に生まれる前にそれぞれの道程を決めあつた
でもそれは並大抵のものではなかつたのです

数千年もの間何度も粉々に砕けてしまつほど身を焦がし魂に焼きつけ
誰も通ることの出来ないような嘆きと悲しみと苦しみと痛みに彩ら
れたものだった

ボクはこのような道程をキミに歩ませなければならぬことが切な

かつた

でもキミはひとつ微笑んでボクに言つた

マウルス・アルテシア

あなたはすべてのク・ラク・キ・リコを解き放ちイキトイキルすべての求めに応じて御身御心を惜し氣なく差し出し命も厭わないあなたはヒト・モノ・トキ・コト・コキコクすべてにアイとチエを授け導くために生きてゆくでしょう

わたしはあなたの働きをただ御傍で見守りゆきます
たとえどんな人生をぐぐり苛まれても

あなたとわたしのアイは不变

もしもあなたと離れて迷つたときはあのアステイのときのように唄を歌うわ

それを風がきつとあなたへ運んでくれる

そしたらあなたは私を探し出してくれるわ

わたしは迎えに来てくれるのを待っています

そしてあのホノホシへ連れていくて

あなたはいつどんなときでもきつと必ず迎えに来てくれる

わたしは信じています

きはなち

こびりついたカルマの殻を一枚いちまい剥がしてくれるでしょう

遙かな過去から永久の未来まで

あなたとわたしのアイは永久不滅

どんなに離れていても空と道はあなたへと続いている

風が空を渡りわたしの知らせをあなたのもとへ運んでくれるでしょう

メイシア・マルキュリア

ボクはもう次の瞬間に何があつても躊躇はしない

今はすべてを神に任せせる

ボクは望まれるよつにただ生きる
キミと永遠のアイを成就する為に
過酷な運命に苛まれよつとキミとともになるものならばそれも願うこ
となれど

ボクとキミは一枚の布をひき裂かれた様な人生を数千年の間刻まな
ければならない・・・・・
でも・わかっているよメイシア
もう後戻りはできない

キミのボクへのアイはボクが誰よりも知つている
ボクもキミへのアイを信じる
キミをアイする心はこの宇宙ゾラよりも高く
時空を超えて拡がつてゆく
キミとどんなに離れても

キミの唄が届いたならボクはキミを探し出して迎えに行くよ
きつと・・・必ず

そのときはすべてをボクに委ねて

キミはボクのカイナでタコタコとコリコラレ
元の世界のアスティへと運ばれることだらう
メイシア・また・・笑顔でキミに逢えるその日まで
キミを愛しています・・・永久に・・・・・

そのとき光り輝く朝日が昇り虹が天空に現われて
僕達ふたりを照らしあわせるのだった

1・4 天空の虹（インティア）

やがてキミとボクは別々に地球世界に生まれおちたのです
そのときの僕たちは生まれは別々でも神の導きによつて必ず出会つ
ていました

初めはあまりにも違う星の環境に戸惑つばかりでした
何故なら肉体も魂も人もその感覚もまったく元の世界とは異なるこ
とばかりだからなのです

その肉体と魂を纏うことそのものが想像を絶するような感触なので
した

しばらくすると他にも外から転生している方がいることを知りました
した

その方々が家族となり友人となり手とり足とり導いてくれたのです
何度も転生で地球の環境や肉体感覚にも次第に慣れていきました

あるときキミとボクはインティアの大地にいたのです

そのときもふたりは神の導きのもとに出会い愛しあつてしていました
キミとボクは初め同じ師グルのもとに帰依していました

僕達は神のアイを現わそうと日々を修行のうちに過ごしていたのです
しかしその時代の私達の師グルは男女の性を否定しておられました
何故ならその時代の男女の性は乱れに乱れていてその影響は計り知
れないものがあつたからなのです

ボクはいつか師のこころに従いキミを遠ざけて修行するようになつ
ていつたのです

そんなボクにキミは不信を感じてか

あなたはどうしてわたしを避けるのでしょうか・と
幾度となく訴えてきた

そしてある日ボクは悩んだあげくにキミに告げたのです
もう此れからは一緒にいることは出来ないと

でも君は受け入れなかつた

キミは言つた

ふたりでいなければアイをあらわすことは出来ないはずです

それなのになぜそんなことを言つのです・・・

あなたはあの時のわたしとのアイを忘れてしまつたのですか・・・

・
そうだわ

あなたは師の教えに惑わされているのね
わたしが師に会つて訴えます・・・・

までよ・・・ボクはキミの腕をつかんで止めた

師のおっしゃることは正しいのだよ・ボクは師を信じています
だから・・・・だからボクの言う事を聞くんだ

ボクは力尽くにキミの腕をつかみ必死の形相でキミを睨みつけていた
キミは・・・それならば・それならばわたしは死を選びますと言つ
て黒い大きな瞳から止め処もなく涙を零すのだった・・・
だが神を求める道を断念するわけにはいかなないと

その時ボクは譲らなかつた

ボクは神より生を受けてその命を自ら絶つことは断じて許されざる
こととキミを叱りつけキミの頬を叩いた・・・

キミはそのときじばらく切なげにボクを見つめていたがやがてボク
の前から立ち去つていつた

ただの一度も振りかえらずに・・・・

それからじばくしてキミが女ヨギになつたことを風の噂に聞いた
のです

キミはガウリー女神（シヴァ天の神妃）に帰依しその神とひとつに

なつと修行していた

ガウリー神は力強い十八の腕を持ち

その腕にはさまざまな武器を携え

恐ろしい魔を打ちひしき

足下の蓮華の下にはアスラのマヒシャを踏みにじつている

お乳はあらわにそのまままで

腕や腰に金属の輪のようなカザリものをつけているだけの姿だった

キミはガウリー神と同じその姿で趺坐しヨガをしていた・・・

『神は無一物・・・だから私も無一物なのです』と

キミは何も所有せざる身は何も纏つてはいなかつた

キミの乳房はもちろんハナビラも人の目に晒されていた

人々は美しいヨギを見に押しかけた・・・

中にはキミを真の神の化身と崇める信者もいたでしょう

でも大半は好奇心と興味で集まつた者達であったのです

そのときキミは面前にぬかずたくさんのお供に崇拝されること

酔つていた

ひれ伏す男たちを弄ぶことに快感を覚えていたのです

それはボクへの当てつけでもあつたでしょ

でもボクにはキミの気持がわかつっていた

キミはボクの曇つた目を覚まそつと自ら身を投げ出していたんだね

ボクはキミを傷つけた

修行に邁進するあまりに真実のアイを忘れていたのです

あの頃のボクはまだ何もわかつていなかつた・・・

そしてそれ以来キミはボクの傍を離れて転生をしていったのです

やがてボクは日本に転生をして神道を歩みはじめていました

キミはインディアからヨーロッパへと転生していつたのです

今回の生涯でキミとボクは再び巡り逢えた

今生初めて出会つたときのキミは全身に氣を漲らせ

ひとりでだつて何でもできると言わんばかりの様相をあらわしていた
もちろんキミがキミでボクがボクだということは初めて目と目があ

つたその瞬間にわ
かっていました

思えばキミと離れてからの幾千年

キミはどんな想いをしてこの地上の上に暮らしてきたことだらうか
そのすべてをあらわして余りあるようなキミの姿に

ボクは始め戸惑を感じていたのです

でもボクはキミと話したかった

キミとのアイを取り戻したかった

幾千年違えなかつた時間

ボクはキミにずっと謝りたかった

ボクが・・・間違つていたと・・・

でもキミはさきつといづりのひのでしょ

あの時はしかたがなかつたのよ

あなたは一生懸命だつたわ

本当は私も悪かつた・・・

あなたに叱られてもそれでも

たとえ遠くからでもあなたを見つめ続けていれば良かつた

でも私はあなたに気がついて欲しかつた

だから私はあなたと違う方法で神になる修行を選んだの・・・と

今回の生涯で神はチャンスをくれた
キミとのアイを取り戻すチャンスを

ボクはキミにいづり話した

神のこと宇宙のこと其れからソレカラ・・・

でもキミはやつぱり

あのインディアの時代からのことを忘れてはいなかつた

きつとボクを恨んだことだらう憎んだことだらう

でもそれはボクを愛するが故のことだとこづこづとも知っています

あの時代からのキミの悲しみは

今も癒えてはいなかつたのですね・・・・・

今生再会してからキミは余りに少しずつ変わつていて

強さが優しさに

硬さが柔らかさに

そして自信が恥じらいに

会つるにキミの心もカラダも

ボクと愛しあつてゐたあの頃を思い出しばじめていたんだね
その頃からキミはすべてをボクに捧げたいと心で言つていて
でもボクは知つていながらキミと距離をおいていた

キミを受け入れればボクはどうなつてしまふのか自分でもわからなかつたから

キミを愛する心を抑えられなくなつてゆくだろつと思つて
その時すでにボクにもキミにも家族があつたから・・・・

ボクがキミを愛したならば

きっとお互ひの家庭は壊れてゆくだろ

ボクは神を裏切るようで不安でそして怖かつた

だからインディアの時のようにキミを愛することを間違つて
思い込もうとした

あの修行に邁進してキミを見捨てた時代と同じように・・・・

キミはそんなボクの態度を悟つて今回の生涯ではこのままでいいと
心の中にボクがいればそれだけでいいと想つてくれていた
それからボクはキミの住む街から離れた

ボクはキミのことを諦めていた

キミから逃げていたんだ

それなのにキミは心の中でいつも

再会したあの日からずっとボクの心に呼びかけてくれていたね
イチ姉さんもそんなキミを見ていられなくなつてボクの所まで来て
くれて

キミの便りを聞かせてくれた

お土産にお米を運んでくれて · · · · ·

ボクは少し · · 頑なだつた

今回の人生でキミは南の地のアマミのアサドに生まれ

ボクは北の大地のコウバリに生まれた

キミは水のセイでボクは火のセイ

キミもボクも幼い頃からずつと堪え憚んできただね

世間の挾間で · · · · ·

誰一人理解者は無く

わかつてもらえる人もいない

そしてそのまま一生を終えてもいいとさえ思つていて

それは自分以外が大切であつたから

でもステキなことも

それは人と出会えたこと

友人に

家族に

子供達に

そしてキミにも再び

お米は田に育まれる

小川から田には水が灌がれ稻穂が育つ

アイを育てよとボクは後ろを押されたような気がしたよ

そしてあの日キミとボクは再びミタビ出会い

そして愛しあいひとつになつた

2006年11月19日

ミユーズがビートルズのアルバムにキミとボクの今までとこれから
を現してくれた

アルバムを聞いているとそれがわかります

キミとひとつになつた次の日に世界同時発売で・・・
キミとあの時に戻りたい
キミをリンと呼んでいたあの時に

あなたがわたしを迎えてくださいたドシャ降り雨のあの日
黒くて大きなペガサスさん（車）は柩を運ぶ馬車のようにわたしの
目に映りました

アア わたしを運んでください
只それだけが心を占めていたのです
あなたとわたしの 始まりと終わり
数多の別れと出逢いを繰り返し紡ぐアイを織り成してきた

髪飾り

神のアイに照らされて

御身の手もとから響くカムワタル音

アイに照らされアイテラス

髪飾り

朝陽に照らされ夕陽にコラウ

瞳の中に映るあなた

瞳の中に映るわたし

重なる影はひとつ

ふたりアイ鏡に映る

わたしのセナからカットしてゆくしなやかな腕
流れるようにリズムを刻むシザー

あなたの腕が触れそうで

あなたの吐息がかかりそうな距離にいるのに
触れぬ所にいるあなたとわたし

もどかしくて切なくて

逢う度にまた逢いたくなるの

声を聞くたびに鼓動が高鳴るの
秘めた想いを貝に託して
込み上げる愛しさを珊瑚に託して
虹を渡り逢いにゆきたい
鏡は知っていたの

わたしの First Love

あの日のボクとキミは心もカラダも
細胞の一つひとつまでがひとつに重なるうとしていた
ボクがキミのハナビラに指先でふれると
そこは閉じて渴いたイズミのようだった
ボクは・・・ボクは切なく心が張り裂けそうだった

ボクは込み上げる想いをこらえてキミのクリスにキスをした
舌でころがしなぞり剥ぎ取るかのように何度も舌で愛撫していた
やがてハナビラを舌でなぞりあげ
ツボミにもキスをして舌をせしめた
ハナビラを押し開くようにキスをして舌を絡ませて
ボクの零をハナビラにソソギイレタ
キミは呼応するように女神の唄を奏でていた
一時間ほどもクンニしていただろうか
やがてハナビラの奥からはミツが溢れて
ハナビラはやわらかくなっていた
それからキミはボクのシンを口に含み慈しんでくれた
ゆっくりとそしてときに激しく
ボクはキミの慈しみに応えるようにキミにキスを
それは長い年月を埋めあわせるよつよつとゆっくつと深く
キミはボクに身を委ねて
応えるようにクチビルを合わせていた
キミの瞳からは零がこぼれて頬を濡らしていた

今まで離ればなれになつていた間の寂しさと悲しみと切なさが

一瞬に込み上げて

抑えようもないほどに哀しく切なく止め処なく・・・・・

気がつけばボクの頬も濡れていた

やがてボクはキミの中に入つてゆく
キミのハナビラは初めてのオトメのように狭かつた
少しづつ入れては戻りながら奥へと入つてゆく
そしてシンのすべてをハナビラが包み込むようにシンとハナビラは
ひとつになつた

キミを強く抱きしめるとキミの全身はフルエクスアートいた
ボクが静かに動くとシンとハナビラは絡みあつてシンとハナビラは
ていつた

キミとボクは時間の過ぎるのも忘れて愛しあつた

何度もナンドモ・何度もナンドモ

キミはステキだった・とてもとても

ボクは生まれて初めて女性を擁くような感覚を憶えていた

わかつてはいた

キミと初めて出会つた時からわかつていたのに
やつぱりキミとボクは唯一無二の存在だった
すべてがこんなにもあいあつていたなんて
こんなにも・こんなにも・・・・・
キミとこうしてひとつになるまで
ボクはなにもわかつてはいなかつたんだ・・・・・

以前にキミが撮つた雲の写真はキミとボクの母星の王が乗る船・・・
ユーチ

アステイにいた頃はアイをあらわす事はあまりに自然だった
いまそれをこの肉体と魂で新たな意味意義価値を実践し創ること

がボクとキミのあの日の誓いだった

ボクは5人の子供を授かりキミは2人
合わせて7人の子供達

家族という人類とともにアイをあらわすことが
ボクとキミのあの日の決意と誓いだったんだね

7は宇宙で進化をあらわす意味の数

子供達は地球の子供であり宇宙の子供達
キミとボクのアイが成立ち

すべてに現われゆきますよつに

今あの日のキミとボクに還る

あのアステイの時のレイとリンに

レイ

愛しいあなた

あなたのアイが得られないと知り絶望と痛みを修行にかえて
私はガウリーの化身として搖るぎない地位を築いたのです
だけど魂はこよなくあなたを求めておりました

その後の転生でもヨーラシアを放浪し風の噂にあなたを訪ね歩き続
けていたのです

あなたが選んだ神への道を

影ながらでも支えることが出来なかつたことを悔やんで

星の導きに叛いたことも・・・

わたしもあなたに逢つて許しを請いたかつたのです

けれどあなたを見つけ出すことは叶わず逢うことの出来ない絶望感

から海の底に沈み

アコヤ貝の中に閉じこもりわたしは何も感じない無になることを望
んだのです

ある時神様に拾われた私は

過去の記憶をすっかりと忘れ去っていました

それから神様の寵愛のなかで過ごすうちにヤマトのアマミに生まれ

たのです

幼き日々は人も自然のひとつにしか思えず文明の窮屈な世界には馴染めず

風や花や木や海と戯れて時の存在を忘れていることが多かったのです
もしも都会に生まれていたならば今のわたしはなく早々に命を絶つ
ていたことでしょう

そんなアマミの自然の中で育つた私がヨコハマの地を選んだのは
神のお導きだったのだと今ならばわかります

初めてあなたと出逢い

瞳をあわせた時の想いは今でも忘れることは出来ません
あなたとひとつになれた時にあなたの瞳に映る私が見えて
その中に神が宿るのを観ました

そしてあなたと私の遙か遠い過去を見せていただいたのです
あなたと同じ星の同じ時代に今を生きていることを神に感謝いたし
ます

過去の悔やみきれない過ちを繰り返すのはもういやです
だからあなたに会えなくともメールが出来なくともあなたを恋しみ
慕い

慈しむ心を胸に宿して生きてゆこうと想つていたのです
イチ姉さんがあなたに会いに行くと聞いて

その目を通してあなたの姿を観たい

その耳を通してあなたの声が聴きたいと思つていました

私は

許されるならばあなたの奥様も子供達も自分の家族のように愛したいと思つています

きっとあなたも同じ気持ちでしょう

今生で結婚したワカヤギさんは若い魂ですが過去世に大陸を旅して
いたときに縁があつたようです

彼の子を身籠つて母になつた時に

今回の人生で夫と呼ぶのはこの人だけと決めていました
神の祝福と眞実のアイが永遠となるように
家族を愛し続けることを約束します

今はSOMETHINGが流れています リン

SOMETHINGはキミへの懺悔

インディアの時代にキミを追つてからのボクの胸の中は虚しさで一杯だった

その虚しさを修行に専念することでかき消そうとしていた
キミへの想いは修行を妨げる迷いなのだと決めつけて一心不乱に修行をした

でもキミへの想いは日増しに強くなるばかりだった
それからじばらくしてキミの噂を耳にした

キミが女ヨギになつたことを・・・

そのときのキミの姿を知つてボクは愕然とした

それはボクへのあてつけだらうと思つていた

そう想いキミを憎むことでボクは自分を正当化し慰めていたのです
キミの悲しみの深さも考えずに

それから幾度も転生を繰り返しその先々で人生を送ったのだけれど
胸に残る虚しさが消えることは一度もなかつたような気がします

SOMETHINGはキミへの懺悔のメロディ
きっとキミには伝わるだらう・・・ レイ

あなたの傷みが・・・響いてきます

わたしはあなたへの想いを胸の奥に閉じ込めて
すべての欲を捨てさり顧みないことで

あなたを失つた悲しみから逃れようとしていたのです

リン

1・5 天空の虹（ベネツィア）

キミはコーラシアを流離つて旅していた時に砂の嵐に遭い砂漠に倒れたのです

キミは微かな意識の中でもうこれで終わり

これで神のもとへ帰るとキミの命の火が消えかかるうとしていた時に

キャラバンが通りがかりキミを助けたのです

そのキャラバンの中に過去世のワカヤギさんがいました意識が戻るまで彼はずつとキミの側についていた

キミは三日の間生死をさまよい

そして彼に命を助けられたことを知ったのです

キミは美しかった・・・

彼はキミを見たときからキミの虜だつた

彼はキミを優しく扱つた

キミは彼の思いを汲み

救われた命なのだからとすべてを捧げたのです

彼はキミに夢中になつた

そのとき彼はキミのこと有何があるひとつ誰にも渡すまいと心に誓つていたのです

私は彼の愛を利用していたのです・・・

生命を助けられたキミはそれから彼と一緒に旅をしたのです

どこかでボクに逢えるかも知れないという希望を胸の奥に秘めて

そしてキミは彼の故郷ベネツィアへ連れられていつた

そこでの生活はキミにとつては窮屈なものであつたでしょう

彼は商人だったので付き合いが広く社交界などにもキミを連れだした

そこに集う貴族の淑女の方々はキミの美しさが嫉ましかった
腹癒せにキミを異国の奴隸女と呼ばわつて軽蔑のまなざしと言葉を

投げつけて

キミを詰り笑いものにしたのです

彼も人前ではプライドがあつたのでしょうか

そんな時のキミをかばつてはくれず見て見ぬ振りをしていた

でも紳士の方々は違つた目で君を見ていた

砂漠の中に輝くエメラルドのようなキミの魅力に誰もが惹きつけられていた

そんな羨望を受けるキミを所有していることにワカヤギさんは満足していた

キミはそんな紳士方から代わるがわる誘いを受けていた

キミもやがてその誘いに乗じるようになつていった

そんなキミをワカヤギさんは手に余るようになつてゆき

ある事件をきっかけにキミを屋敷の中に閉じこめてしまつた

キミはただ閉じ込められた部屋の窓から見えていた港の海を眺めていました

そのときのキミは海だけが心の慰めだったのです

彼はいつからか故郷の若い女性と暮らすようになり

キミを相手にすることはなくなつていきました

しばらく後に彼は行商の途中で事故に遭つて世を去つた

この時のことをキミに伝えるのは辛い

でも過去を知つて今を作り変えなければ未来は変わらないのです

カルマの渦からキミとボクの運命を取り戻すためにも・・・・・

キミと離れてからのボクは倭に転生していました
アヤヤ

そこでは朝廷に仕えて神のコトノハを人々に伝える神占をする巫女

だつたのです

次には古事記の編纂に関わることをしていました
そして次の時代は親鸞上人の弟子となっていました
このとき今の妻なる方と出逢っていたのです

妻が守護霊様に夢で見せていただいたのは

ボクが無垢の衣に金糸銀糸で通ずられた僧衣で舞を舞っている場面

でした

そのボクを妻は見つめていた

妻はボクを愛しく思つてくれていました

しかしそんな妻の気持は時代の激動にもまれて叶わなかつたのです
でも妻はボクへの想いを忘れなかつた

今回の人生で夫婦になつたのはこの時に定まつていたのです

ボクの人生はキミへの懺悔とあの日のことへの自責の念で一杯だつた
だからいつも異性を遠ざけていたのです

親鸞上人と出会い弟子にしていただいた時

上人は他の仏道求道者とは違つておられました

この時代仏道では妻帯することは強く戒められておりましたが

上人は妻帯しておられました

上人は若き頃比叡山にて修行をなされその教えを学ぶほどに振り切れ
ない迷いを感じ

やがて比叡山を降りて法然上人と出会い念佛の門に入られたのです
あるときに一人六角堂の中に閉籠り座禅の行をなされたのです
そのときに如意輪觀音様が上人の前に出現され

私があなたに抱かれましようと女身になられ上人に抱かれたのだと
・

それからのち上人は妻帯されたのです

上人は私に求道者こそ妻帯せねばならぬ

万人が妻帯せず子生み子育てを放棄したならば

この世は百年もまたずに終わりである

求道者こそは万人と同じ境涯に身を置いて念佛他力の行を踏み

御仏の本願を成就するのだと

私に教えられたのです

レイ

永遠の愛を誓つたのにあなたを裏切つた私

あなたは倭の地に生まれてからも神に仕える道を歩んでいたのです

ね
リン

キミと離れてからのボクにはそれしかなかつた

神の役に立ちたい

ただ一心にそう想い続けることだけがキミへの思慕

キミへの懺悔だつた

レイ

憶えています・・辛い過去・・封印したいほどの
ヴェネチアの頃に中世のドレスを着た私

その左側をワカヤギさんが歩いています

私はガラスを踏んで右足にケガを負い

馬車に乗せられてどこかの教会のようなお屋敷に運ばれて

ドレスとベールを着せられようとするの

ケガの手当てを先に・・とひとりの方が言つてください

右足から破片を取り出し

傷を洗い手当てを受けて

ブルーグリーンのドレスの上から

白いベールを着せられて大きなドアの前に立たされた

このドアの向こうはイヤですドレスを剥ぎ取り逃げようとするの

ですが

逃がしてはもらえなかつた

けれど花嫁になるのは免れて

それからのわたしは彼の飾り物にされたのです

豪華な部屋に贈り物

監視も兼ねて身の回りのお世話をする人達
夜になるとわたしの部屋を訪れて今夜はこのドレスを着るようにと

飾り立てられ

パーティーや社交場に連れていかれました

わたしはペットのように扱われ飾られたお人形のようでした
逃げることも逆らうことも拒むことができなかつた

逃げることは諦めて心は荒んでゆきました

やがて男性の視線と甘い言葉に自惚れを覚えて傲慢になつてゆきました
した

言い寄る方々には身を委ね彼に見せつけました
でも彼は何も言わなかつた

その方々は彼の客人であり取引の相手だつたから

愛する女を守ることも留めることも出来ない彼を私は蔑みました
彼はそんなわたしを扱いかねて

やがて遠ざけられて海の見える塔に押し込められた・・・・

辛い過去も

きちんと向き合つてカルマを消滅しなくてはならないのですね
犯した罪の重さに心が張り裂けそうです

神様は私を許してくださいでしようか

赦されるならばどんな罰にも堪えて未来へと繋げたい
あなたと離れることだけはもう堪えられない
もう私をひとりにしないで

リン

今回の人生をよく眺めてごらん

リン

過去の出来事は形を変えて「アーマム」に現われて「アーマム」がつく
よね

キミとボクは再び出会いボクはキミにエピソードを送った
もうキミの罪もボクのキミを捨てた時の過ちも神はみんな許されて
いるのです

ただカルマの残骸のようものはまだ人生のあちらこちらに在るの
です

それを今回で奇麗に消滅する為に

その為のミカエリでもあるのですね

キミもボクも数千年をかけてお互いをひき裂かれたような人生を生
きてきたんだ

砂を噛むような生涯を現実に味わってきたのです

だからこそキミとボクが愛しあいひとつになれた時になんとも言いつ
ようのない感動になつたのではないでしようか

そしてその気持は時間が経つとともに拡がつてゆくばかり

アア

すぐにもキミのところへ行ってキミを抱きしめたい

けれどカルマの残骸はそれを容易に許さない

すべての過去はこれからの中の為に必要なことだったんだね

レイ

ベネツィアで身も心も傷つき荒んだわたしは

次の時代に男に生まれました

イスラムのキングダムで神の使徒となり誰にも心許すことなく侵略
と略奪を繰り返し

非情に人も殺し女も犯した

孤独で冷淡で誰からも恐れられていきました

眞実の愛から目を背け神の道から外れたわたしは

嵐の夜に天の裁きを受けて海の底に沈められたのです

リン

キミは人間に復習することを誓つたのです
ベネツィアの時に散々に罵られ虐められたからね
それがキミの胸に宿り反逆してその運命となつた

覚えているかい

キミとボクが再会した時のこと

キミの本当に復讐したかつた相手は

他の誰でもない

あのインディアの時にキミを捨てたボクだつたのです

レイ

覚えています

あの日あなたと田を合わせた瞬間に感じた様々な想い
でも憎しみや恨みよりもこみ上げてきたのは愛しさでした
私が天上界での神様との誓いの夢をあなたに話した時
鏡に映し出されたあなたとわたしが夢に見たふたりだとわかつたの
です

それからは溢れるあなたへの想いにどうしていいのかわからずになりました

リン

あなたの送つてくださいたエピソードがすべてを語っています

ボクとキミはこの星に転生してから

半分は地球から頂いた魂と地球の肉体を持つてゐるのです

認識や知覚は以前の星のものがあつても

感情感覚は地球の方々と何も変わらないのです

キミと離れてからのボクが自責の念にかられて懺悔と後悔の数千年
を送つたように

キミはボクへの愛が憎しみと恨みとに変わった・・・

でも神は知つてゐる

すべては神を愛するあまりの縛れからの出来事だったということを

千の夜と千の昼を超えてふたりの物語が結びあえた奇跡

神は朝に夕に

海に空に

風に花に

雲に虹に

田と月とあらゆるヒトに田に映り耳に聞くメッセージを下さっています

挫けそうになる私を見守りあなたの背中を推してくださったあの方向に

お礼を申し上げねばなりません

里を流れる小川は田を潤し稻を育て命を育む

やがてそれは大河となり海にそそぐ

水は太陽に暖められて天に昇り

再び雨となり大地に灌がれる

火と水の嘗みは自然界の掟でもあり不動の約束

ミズは命のミナモト

ヒは命をマモルのですね リン

僕達は対極の経験をしてきたのです

そしてお互いの経験がともにわかるようになつてているのですね

僕達は別れて正反対の嘆き悲しみ苦しみ傷みを感じていた

今朝はまどろみの中にキミが腕の中にいるような気がしていた

ボクは遠い星の頃の名でキミを呼んでいた

リン・・・と

ラヴにはこの生涯が終わると地球世界を離れて母星に戻ることが暗示されています

あらゆる時代の家族や友人方とのお別れの時が暗示されているのです

す レイ

田覚める間際にあなたの名を呼んでいました
再び巡り逢い結ばれてあなたはエピソードをあらわしてくれた
私の胸に過去の記憶が呼びさまたれた
この七日間で遙か数千年を旅したような感じです
この気持ちを言葉であらわすことなど・・・できません
リン

2・1 ソクヘの道（RESPECT）

車を走らせていると空一面にエックス型の細長く引かれた雲が目に映りました

その雲の先は限りなく延びていました
その中心に向かつて尾をひいて進んでいるホウキ星のような雲が海の方からひとつ 山のほうからもひとつ
その下の地上には虹が現されました

何枚かのフォトの一枚だけに虹がほんのわずかな瞬間に レイ

神が見せてくれているのは何か予告のようなものでしょうか
これから的事を見せててくれているのかしら リン

天空に現われたエックスの雲は限りなく延びてどこまでゆくのかわからぬほどだった

天空に広がるエックス雲は宇宙神を現わし
その中心に向かうホウキ星の雲はキミとボク
それが中心にむかい宇宙神とひとつになろうとしていた
ひとつになるというのは宇宙神の心とフルマイをこの肉体と魂のその身そのままで現わすこと・・・
それはアイ

宇宙神はア

人はイ

宇宙神と人がひとつになつた働きと相^{スガタ}・・・それがアイ

過去世には神に顔向けのできないような人生を生きてきた
それで何がわかつただろう

ラヴの最後の歌詞を読んでみるとそれがわかるね

僕達は地球に降りてから嘆きと悲しみと苦しみと痛み

呪いと憎悪と自責と後悔そして諦めと絶望

冷酷残酷のありとあらゆる非道に魂と身を纏してきたんだ

そして再び

キミとボクは神の導きによつて出逢い

真実の自分に気がついた

そしてその身そのままでキミとボクはアイを現わす・・・

地球世界はいま天位が変化しているのです

その中にだれも宇宙の真実のアイを心に燈し

現わそうとする者がいなかつたらどうなるだろ(ハ

地球世界はある一定時間の後に永久の終わりを迎えることになる

マヤ文明のホピ族の預言書には

地球は過去3回の滅亡にみまわれたと書かれているそうだけれど
実際のところは過去に6回の滅亡を繰り返していく今回が7回目な
のだそうです

アトランティスの滅亡などもそのひとつなのだね

だからキミとボクは地球に転生したんだ

地球は地の球と書くけれど地は肉体を現わしています

だから今は肉体である物質感覚で人は生きている

本当はチのタマとして久キユウ

チは宇宙神のこと

チハヤブルは神のフルマイをあらわすコトバ
タマは宝のこと

だから玉手箱は宝物の器

久は永遠を意味する

地球は宇宙神の宝物でありそれはやがて永遠のイノチを得るという
意味なんだね

他にも地球には僕達と同じように転生して努力している方々はおら

れることでしょう

その中にたつたふたりだけでいい

真実のアイを現わすか現わそうとするふたりがあれば

そうすれば地球世界にアイはアルということになる

そしてそれが天地に定まれば天位の上昇は最終章を迎えて

宇宙神が地球世界を創り変えられる

そうなれば言靈のヒビキは現象として現実化してゆく
善も悪もカルマの法則によつてそのリアクションは即現われることになる

人類はそこで切磋琢磨して進化真化神化してゆく

やがて人類の階級は消滅し国境も金銭も消滅する

人は天命のもと天意によつて生きるようになつてゆく

貧富も飢餓も民族紛争も天変地変もなくなり

弱肉強食の世界は消滅する

人は宇宙神にたいして感謝と祈りの日々を送り

大進化した宇宙人類との交際も始まり

地球は鎖国を解いた維新の時のように大進化した宇宙人類方の文化
文明をとりいれて

偉大なる進化を遂げてゆくことになるでしょう

地球の滅亡を救うというのは環境に何かすることではない

困つてゐる人達に寄付援助することでもない

宗教で自分が神になることでもない

講演をして人々を感化激励して育てるのでもない

唯

この世界の過去から現在そして未来に涉る

嘆きと悲しみと苦しみ傷みを知つたその魂と肉体のその身そのままで

宇宙のアイを地上世界に現わすことなのです

後のことばすべて宇宙神がなさるのです

ラヴのALL YOU NEED IS LOVEにはそのことが

歌われている

空の雲は今までにそうなりうとしていることを現わしていたんだね
虹の彩はある時にキミと見た虹を現わすものだつた・・・

天空の虹を レイ

私達はこの星で辛く苦しい時代を過ごしてきました
初めてあなたと転生した頃

不自由な魂と肉体をもつてこの星に生まれ

更なる試練となれない環境に戸惑いながら神に見捨てられ地獄に落
とされたような現実を渡り

どんな境遇に落ちても

母なる星で誓つたあなたとの約束を忘れなかつた
だからあなたは私を見つけてくれたのです

そして神にチャンスを『えられたのだと・・・

あなたは魂の半分と肉体のすべてを地球に授かつてゐるのだと教えてくれました

私達は地球に報いなければならぬのですね・・・

雨は木々の葉を緑鮮やかに濡らし土に滲みて小川になる
川の水は大地の形を受けて時に地形を造り変えながら
支流に別れてそれぞの流れをゆき
生きるすべてのものの命を護り育む

別れ別れになつた支流もやがての旅の果てには大海に還る
海はヒに照らされて温められた水は空に還り雲となり
山に大地に雨を降り注ぐ

小さな雨の一滴は清流の源

元はひとつ

神に還る眞実の道

わたしは人類を信じます

わたしは海を渡る小舟
あなたの導きがいるの

全身全靈であなたに添いたい

もう神への感謝を忘れる事はないでしょう

どんな荒波もあなたとなら渡つてゆけると信じています

診療が終わつて静かな部屋にいると

あなたが灯した火がユラコラと波間にゆれる小舟のように
甘く切ない炎となつてわたしの身を焦します・・・・・
忘れかけていた性の感覚があなたに呼び覚ました
このままあなたに身を委ねてしまいたい

そんな誘惑にかられてしまい

リン

ボクはストーブの炎を見つめながらキミのことを想つていました
キミを愛したあの日からボクの体はどうしようもなくキミを求めて
このストーブの炎のように熱くなる
キミを愛したい・・・愛して愛して

狂おしいほど愛したい

キミに逢える日までの時間が苦しく切なくボクを苛む
キミに逢えるときが待ち遠しい

レイ

レイ

ほんの一週間に一日がとても永く感じるのです

あなたに逢いたい・・・

掌に入る小さな携帯電話でのあなたとのメール交換

今まではただの通信手段だつたのにとてもかわいい相棒になりました
もうポケットから離せない・・・・・

此の頃胸に響く星の名前があります

星の時代を思い出すとカラダのホテリが少しおさまるの
優しい時に包まれてあなたの名前を呼んでいた充ちたりた幸せの日々
地球を巡る時代には胸の火もメラメラと赤く凄まじい炎になつたり
蒼く冷たく小さくなつたり・・・・・

あの日あなたとひとつになつて愛しあつたことを思い出すと
想い焦がれて胸はキュンと息苦しく
カラダは炎のようにモエテ抑えられなくなるの
あなたに逢えるまでこんな調子なのかしら
うまく扱えないわ リン

キミの胸の鼓動はボクの胸をも高鳴らせる
もう何をしていてもキミを想わずにはいられない
魂が繋がっていても
やつぱりキミに逢えない間は切ないね

もしもキミと21年前に出会いっていたなら
ボクはいつもキミを見ていた幸せに神を感じて
キミは包まれる愛に神への感謝を想つていただろう
でもそれはキミとボクのふたりだけの世界にとどまる
僕達の描いた未来は人類抜きでは始まらない
母星の名前はイミコエルかイミコエイル・・・といつよつです

レイ

イミコエル イミコエル イミコエイル
胸に響く懐かしさ・・・・

センターに着いて見上げる先の空にあなたの名前を呼んでいました
日々の忙しさの中に仕事をしていくても
地上が朱に包まれる夕暮れ時にも
私はあなたを想います

そんな時にふと時計をみると17の数字だつたりするのです
リン

17はすべて

『神世の進化』という意味があります
ぼくの誕生日も17日 レイ

私の祈りはある日から変わりました

以前はあなたの無事とあなたを想い続けることを赦してほしいと神様に祈っていました

あなたとひとつに結ばれてからは

眠りにつく前に今日の一日あなたと私の家族が平安だつたことに感謝して

あなたと私が神の望みを現わすことが出来ますようにと祈り
朝にはあなたと愛する家族が今日を豊かな想いで過せますよう祈っています

レイ

愛しいあなた

あなたと結ばれたあの日は歓びで胸がいっぱいになり
神様にありがとうを繰り返す言葉しか思い浮かびませんでした

この次あなたと結ばれるときは

この身と魂で神様のアイがあらわせるように祈る言葉を教えてください

れい リン

リン

キミの心の響きが祈りそのものなのです

祈りの言葉は祈りを知らない時のもの

ボクがキミを想う心が祈りであるように

キミの心の響きそのものが祈りです

キミの祈りのメールを受けてボクはさらに祈る

再びミタビ

リンと出会いさせてくれてありがとつ・・・・・ヒ

レイ

祈りは言葉ではなくあなたがわたしを
わたしがあなたを想う心の響き
響きあう心と体をかわしあうことがアイ

あなたと私の永遠の物語

もうすぐあなたに逢えるのかしら

リン

この腕にキミを抱きしめたい

この想いを言葉にできるものならば

いつたいどんな言葉が使えるものだらう

以前にも神は啓示されていたけれど

キミとボクのような銀の鈴の働きを持つ方々は他にも居られるよう

です

只その方達は過去の僕達が歩いていたところにおられるのですね
キミが診療時間中など一日中感じている地球のカルマのウズから現
われる現象を

ボクもあらゆるところから感じています

でも以前と違うのはキミのことを想えること

そうすると優しい気持になれる

人はまだ過てる想い行いがやがてのうちに大きな嘆き悲しみ苦しみ
となることを知らないのです

レイ

レイ

魂の幼さは私にもあります

おかげであなたに逢うのに永い永い年月を費やしてしまいました

今は過去の行いと心に向き合ひ

心正しくありますようにと祈ります

あなたが私の髪をカットしてくれること

元

私は浄化されていたように思います

今宵の月はハーフ

一枚貝のように見えます

リン

リン

キミは神の導きによつて地球世界に泥ナズんでいただけ

ボクも同じ

過去のその時々のキミの氣持を想うとボクの胸は切なくフルエル
この世界では相手に尽して優しくするとそれを当然と思い始め
感謝しなければならないその相手を見下して
なんでも赦されるものと思つて横暴で横着になつてゆく
甘やかされて育つた子供達は例外のないほどにそうなつています
一番に感謝して尽さなければならぬ父母に対して
我儘を要求するのだから

此れは相手に対する甘えが原因なのです

何も言わなければそれで良いと思い込み

指摘すればそんなことを言つなんてひどい許せないと

本人は被害者になつてゆく

それは言葉でもない腕力でもない

立派な暴力であるということには気がついていないのです

溺愛は人間を横暴で横着にし暴力的で自己中心的な人間を作り出す
諸悪のもとなのです

今のキミはボクが恋しみ慕い優しくすると

神様どうかあなた的心に叶い望みに叶う者なりますようこと祈つて
いる レイ

この星の息苦しさは幼いときから今も変わりません
でもわたしの未熟さいたらなさを気づかせてくれたのはこの星の力

ルマのおかげです

カルマを取り除くことは出来ないでしょう

だから人にはカルマのすばりしたを知つてそこから学びアイ
幸せになつてほしいと願います

カルマはわたしにとつて真実を見極め成長させてくれる為の神の賜物
通るごとに磨かれているのだと感じます

リン

ボクはうれしくてキミのメールを擁いています・・・

キミはなかなかわからないところに気がつき実行しようとしているね

アア 愛しいリン

キミを讃える言葉がみつからない

レイ

陽の光が優しく降り注ぐ朝です

あなたのアイに包まれているようです

あなたのアイに照らされてわたしも優しくなります

あなたが前に男性と女性の名前の話をしてくれたことがありましたね

愛しいレイ

清らかな澄み切つた魂に磨き高めてあなたを癒して差し上げたい

リン

リン

キミとボクは靈が一卵性なのです

聖書ではアダムの骨からイブが現われたことになつていますが
あれは時代背景を考慮した比喩なのです

女性に男性同等の社会的地位が認められていなかつた時代だからし
ょうがなかつたのでしょう

最初に現われたのは女性

そして女性から男性が生まれたのが真実のようです

キミとボクはひとつめの靈魂をふたつの肉体にわけあつた

だからボクはキリの年前の中にある

同一から一極

二極から同一へ

そして千変万化になつてゆくのです

2・2 ソラへの道 (REVIVE)

キミとボクは銀の鈴

ソレハトオトビタタエコイシミシタイツカエツクシアツタトキニナ
リビビク

ボクがオガミの鼓をウチナラシ
キミはメガミの唄をビビカセル
トモにチョウシをアワセテ

メグリメグリテ

アワセアワセテ

トキニハゲシクトキニユルヤカニ

アラシノトキノカゼノヨウニ
ナイダウミノサザナミノヨウニ
シオノウネリノヨウニ
ナミノヨセカエシノヨウニ
ユツタリトユルギナク
キミニアレテボクニウツリキミニカエル
ヨセテハカエスナミノヨウニ
ナンドモナンドモ
ナガクナガク
フカクフカク

ヤガテフシギナウズノナカニイザナワレ
ウネリハヤクツヨクナリ
ソノナガレルウネリハヒトツニトケアイ
ヤガテマコトノヒトツニナル
ウズのウエニオシアゲラレテウズノソトニトビダストキ
ウチナルギンノスズガナリヒビク

そのスズノナリナルヒビキはソラヘビビキワタリ
神ノミモトニードクトキ

ソラナル神のキンノスズガスズヤカニヒビキワタル
キミとボクはスズナルゴトク
全身全靈をフルエフルワセテ

金と銀のスズノネハ鳴リ生リ成リテ · · ·
フタリハアメツチニアレテアラワレ
ソラナル神トヒトツトナル

レイ

鼓の音に笛は踊りその音色は澄んだ鈴の音を響かせて
ひとつ波鳴りは輪となり和となるのですね

リン

そうだよリン

銀の鈴は大宇宙に一対ずつしかないです

同じ鈴を持っている相手はこの世でたったひとりだけなんだ
キミとボクのよう

銀の鈴を持つ方々が出会われてその働きが成就されますよ

レイ

アア

私達の銀の鈴を · · 鳴り生リ成らせて
金の鈴を響かせて

一人の鈴の音を宇宙神様どうかお聞きくださり
銀の鈴持つ方々の心にも響かせてくださいますよ

地球の平和をともに祈れますよ

子供達の未来が恙無く健やかなるものとなりますよ

ヒ

愛しいリン

キミとボクの祈りがひとつになり大宇宙とひとつにな

レイ

愛しいレイ

あなたに会えない日々があなたへのアイと神への感謝で満たされる
ように

私の凍えた心もまるく明るく耀いて
毎日が愛おしさに満ち溢れています
あなたが照らし導いてくださるので暗いカルマの夜道も怖くはありません
リン

キミの存在はボクのすべて
キミを愛しひとつになつたあの日から
今はそれがはつきりとわかる
過去から現在までのすべての人生はキミと出会いキミを愛し
アイを現わす為にあつたのだと・・・・
それが今ならわかる

神の世界に創るイエは
やがてのうちに地上世界にも現われてくださいとでしょ う レイ

朝は太陽の近くに小さな虹を見せてくださいました
フォトではわかり難いのですが

ひとつ光の線が空へ真つ直ぐに貫いていました

リン

とても珍しい虹のようだね

今朝ナナコちゃんと散歩をしていると

山々の上のほうは雪化粧でその頂に七人の神様が立つてこちらを眺
めておられました

太陽は火 雪は水 そして雪化粧は真つ白な穢れなき神の世界

山の頂きは宇宙なる神に一番近いところ

七人は進化（造化）の神

虹は祝福を現わし

光はキミとボクの進む道でしょうか

レイ

私は神様の慈愛を感じて感謝の祈りを捧げています
無知で未熟な私にお与え下さった恩恵は計り知れません
神様は私達に何かを託そうとしておられるのでしょうか
見るもの聞くもの触れるものにも神様の意志がおありでしょ
う
神様の想いに心の耳を傾けて

それをしっかりと心に刻み天から与えられた命をイキナサイ
そう伝えてくださっているような気がしています
今朝の虹も自然界の事々も神様のメッセージ
いえ・それ以上の何かわからないのですが道を示してくださっています
る様にも感じられます

白い光の筋は天と地を真つ直ぐに結んでいました
迷うことがなれば母なる星に誘われ
あなたとわたしがその使命を果せるのだと
約束の証のようにも感じられました
空にかかる金色の月があなたの所からも見えているでしょうか
なにか・・・
何か神様が語りかけてくださっているような
なにか告げてくださっているような
今の私にはわからないのです
山の頂きに立たれた七人の神様のお話も聞かせてください

リン

リン・キミの言つとおり
アカシ

証しを見せていただいたのだね

キミは太陽の虹と光をボクのいる方角（山）に見ていたけれど
ボクが観た山の頂きはキミの住むところ（海）の方角だった
七人は進化そしてそれはオミナ（女）であるものの身と心から始まる

進化の神様がキミに宿されたということだね
そしてボクは天に尽す志

オノコ（男）の決意と決心

ボクとキミの誓いが光になつたのです
始めボクは何を見せてくださつたのかわからなかつたのだけれど
キミのメールと写真によつて意味がわかりました
キミとボクはこれからもそんな感じなのでしょう
寄せては返す波のように往相と還相の働きなのだけ
キミは自分では何もわからないと思つてゐるかも知れなけれど
本当はキミはすべてを知つてゐるのです
ただボクに聞いて気がついたような感じになつてゐるだけ
これが本来の男女の役割でもあり働きなのですね　　レイ

愛しいレイ

あなたのいる方角

アア・私には識らなければならぬことがまだまだたくさん在るの
です　　リン

キミの祈りが聴こえるようだ

切なく恥ずかしげにそして感謝に溢れたキミの祈りが・・・

リン

ボクは胸が苦しいよ

キミの胸のうねりが切なく苦しくボクの胸に響く
リン・・・愛しいリン　　レイ

愛しいあなた

一片ずつ殻が剥がれ落ちて謎がとけてゆくようです
今すぐにでもあなたの声に胸に抱かれていたい・・・
来週の明日にはあなたにお逢いできるのですね
あなたへの愛は日増じにつよく深くなるばかり

リン

キミのワカヤル胸をこの田に頬に

そしてボクの胸に感じたい

あれからキミの左の目はいかが
キミは気がついているだろうか

キミの右と左の目がまったく異なる感情を湛えていることに
まあ正しくは感情ではないのだけれど

そう言つたほうがわかりやすいからね

レイ

軽く刺されたような感じがして以来変わったことはありません

以前から右と左の目が違う感じはしていました

でもいまだ守護靈様からはヒントが頂けていないのです

リン

キミの右田にはカルマへの怒りと悲しみ

そして左田には慈しみと喜びが湛えられているのです
チクリときたのは神がカルマの田を潰されたのですね

レイ

レイ・・

私の右田には鬼がいて

左田には女神が住んでいるような感じがしていました

リン

キミがボクの小さい頃から思い描いていた女性のイメージだったんだ
ボクは幼い頃から女性という存在は女神様のような存在だと思つて
いた

でも小さな子供の時は遅らしくても

やがて年月を重ねてゆくと変わってゆく

ボクはそのことを4才の頃からずつと考えてきた

ソラに人の真の姿があることを知つてほしいと願う

天空にある真のスガタを知つてほしいのです・・・・・

結婚してからボクは妻に年を重ねてなお美しくなれるように努力してきた

40歳にして18歳くらいのときのよつつな体形と肌
それが年を重ねるごとに麗しさを増してゆく

それが本当なのだと

ボクは美容師だから女性が美しくなることを研究してきた
エステへ通いスポーツクラブでシェイプすることも良いかも知れない
ビタミンをサプリでとることも良いかも知れない
でもボクはもっと大切なことを知っている

それは心のあり方なのです

そしてその心の状態を作るのにもっともよいのは恋をすること
恋する心は人を美しくして人間としても成長させてくれるもの
恋は人を生き生きとさせ明るくさせる
何をしていても楽しくなり生きがいを感じさせてくれる
しかし妻にそれはかなわなかつた・・・・

結婚して数年たつた相手に恋心を持つこと

それはとてもなく不可能に近いことをボクは15年の歳月の中で
知つたのです

それでもボクはあらゆる手を尽した

でも妻の心境を変えることはできなかつた・・・・

初めて会つた8年前のキミは人の世に泥んでいた
再会した時にボクが戸惑つたのは天空のキミの相スガタを知つていたから
でもキミはやはりリンだつた

ボクはずつとこの8年の間確かめたかつた
もうすべてを諦めてもいた

生きる望みはなにもなかつた

ただキミのことだけ・・・

キミの事だけを最後に確かめたかつたんだ

そして11月19日のキミとの再会

ボクがキミ以外に癒されることはないのです
キミも同じ想いでいることでしょう

キミはやがて真のスガタに戻つてゆく

天空にあるキミの真のスガタと心に還るのです

レイ

再会したあの日

あなたも不安だったのですね

私がすべてを思い出すことができるかどうか

私が本当に双身の存在であるかどうかを

リン

あの日のボクは一生に一度の賭けをしたんだ
それまでのボクは妻と子供達の為に生きてゆこうと想えていた
そんな時にキミのお姉さんがキミの近況の知らせとお米を持ってお店に来てくれた

その日から忘れかけていたキミのことが心から離れなかつた
あの日ボクは意を決つしてキミに逢いに行つたんだ
大いなる衝動に駆られて・・・・・

そして土砂降り雨の中キミと海のホテルに
そこでキミと愛しあいひとつになつてわかつた
ボクはキミを探していたこと

ボクの命はキミと会う為に在つたことを・・・

あの時ボクは不安だつた

何か見えないものを手探りで探すような不安と心配
でも衝動はそれにも勝りボクはキミに逢いキミを抱いた
大いなる衝動がキミとボクをひき合わせた
それから僕達は過去のすべてを想い出す

与えられたツトメを

パズルのピースが一つひとつ揃つよう

レイ

寒々と降り注ぐあの雨の日

わたしはあなたに抱かれることになつても一度きり
最初で最後なのだからと自分に言いきかせ
喪に服すつもりであなたにお会いしたのです

今生のお別れと思つて・・・

その日を自分の弔いの日と決めて

そうして私は命の火が消える最後の日まで

あなたへの想いを目に閉ざし神様のもとへ還り

赦されるならば宇宙の無にしていただくようにお願いしていました

あなたの腕の中に抱かれた時

あなたの瞳の中に私の過去から未来へのその意味を映し出してくれたのです

それからのメールの中でひとつまたひとつ過去の出来事が想いだされて

あなたとわたしは出逢い愛しあう事が必要だったのだと
そしてあなたも同じ想いであることを知り

私は有りのままのすべてをあなたに捧げ尽くしたいと思いました
イチ姉があなたを訪れたのは十月一日でした

定めは神のちりばめた宝

現実の運命に気づかずに過ぎゆくことや

偶然と思い違いしてしまうことがあるならば
きっと宝は風化してしまうのでしょうか

ふたりを引き合わせてくださったのは天地のサダメ
ふたりが歩む道は天地との約束

天命を悟り成就することが

真のアイをあらわし永遠の命を神に捧げること

それがあなたとわたしの誓いだったのですね

あの日からわたしの身にも魂にも進化が起きています

あなたが観るものを見に映したあなたの手に触れるものを心で感じ

あなたの声に神の心を聞きなさいと守護の方からいわれています

レイ・わたしのすべて リン

キミは・・・キミはなんてステキなのだらう
言葉では言いあらわせない

キミを・・・

ボクはキミを愛している

キミの左眼は宇宙なる神の眼

愛しいリン

キミの声が今もボクの胸に響いている

レイ

2・3 ハルの道 (REVOLUTION)

小さな時から私は男になりたかった

何故男に生まれてこなかつたのだろうと恨みもした

来世は必ず男に生まれたいと願い自分のことはボクと呼んでいました

そして愛する女を守り命をかけられない世の方々を軽蔑し憎んでも

いたのです

私が男ならこんな愛し方はしないのこと幻滅もし女として生まれた私を満足させられる男性はいないと諦めてもいた時にあなたと出逢つたのです

夢で見ていたあなたに片思い・・・

今生で結ばれずとも死んでからならきっと逢える

あなたは迎えに来てくれると思っていたのです

でもあの雨の日にあなたは私を見つけてくれました

私達の為に地球での出会いを助けてくださった方々もきっと安堵しておられますね

パズルのピースは集まりつつあるのですから

レイ・・・

やつぱりあの雨の日は弔いの日だつたのね
トモミは死んでリンに生まれ戻つたのだから リン

リン

キミの言つとおりだね

シヴァの神は破壊の神といわれて いるけれど
造化の神でもあるのです

破壊して創る

古家そのままの上に新しい家が建たないよう
すべてのことは神の世界（見えない世界）が先で地上世界には一定

時間の後に現れてくるのです

カルマの地球が創り変わるよう

ボクとキミも過去から現在をミカエリすべてを知った上で未来を創

造してゆく

僕達の人生もこれからだね

リン

今度逢える時に幼い頃から20歳頃までのキミのフォトを見せてくれないか

そのときはボクのフォトもキミに見てほしい

二人の出会い前の過去を

お互いが知らない今までを心に留めるためにも

　　レイ

アマミの実家においてあるのでそんなにはないと思つけれど探してみます

レイ

今夜もあなたを胸いっぱいに感じていたい

空を行き交う雲に想いを託し来たる日に想いを馳せながら波打ち際の砂に横たわり

地球の鼓動に身を任せてすべてをあなたに委ねてまいります

リン

時は大きな唸りを響かせ動いてゆく
大きな波が打ち寄せるように

今これから波の山を越えんとすることに僕達はいるのでしょうか
越えた次の瞬間から世界は見違えたように変わるので

今日の空は美しく晴れ渡り頬に感じる陽射しが暖かくてとてもいい
日です

キミは今じり忙しくしているのでしょうか

　　レイ

午前中はフリーなので来年度のスケジュールを作っていました
でもあなたのことが想われてちつともはかどらないの
傍田にはパソコンとこらめっこしているように見えるでしょうけれど
・・・

ヨコハマは薄曇り

時々暖かな陽射しが顔を出しています リン

明後日にはキミに会えるのだと思つと鼓動が騒ぎ出す レイ

レイ

朝からわたしの鼓動も・・・

今日は人に会うのがとても辛い

誰かと話をしていてもあなたの名前を呼びそうになる
胸にたつ細波はおさまらず目にふれる物にはあなたが映り
零れそうになる想いが瞳を濡らしてしまいます

出逢いの時を穏やかにと約束したのに・神様ごめんなさい
リンはもうレイの事しか考えられないのです

今日はフルエル心を鎮めることができません リン

先ほどミスズのお迎えの帰り道に雲が夕焼けに染まつっていました
キミもボクもあの雲のよつに神の夕陽にすっかりと染まつてしまつたね

キミの切なさはボクの胸に響きボクはキミを愛しく思つ
その想いはさらにキミの胸に伝わり全身へと誘われてゆく
もう鈴の音が聞こえているようだよ

明後日はキミに会える

きつと・・・・・

ボクはキミと逢つてから気がついたことがあるんだ
ボクは人を好きになる気持というものを今まで知らなかつたようだよ
だつて

今もキミを想うと涙が零れてくるんだ
人を愛する心というのは双身のキミだけに持つことができる心だつ
たんだね

昨夜の夢の中でキミがボクをじつと見つめていて
その大きな黒い瞳から大粒の涙がポロリポロリと溢れるように零れ
るんだ

ボクの為に泣いてくれたキミの涙
そのときキミの名を呼ぶと田^{アシタ}が覚めた レイ

恋の患^{アレ}いってこんな風なのかしら

私も初めてのことで何も知らない少女のよう
あなたの涙は私の胸を伝っています

愛しいレイ

あなたが私を

私があなたを呼ぶのです
あなたを愛しています

あなたと私は過去にさまざま^{アシタ}な出会いと別れを繰り返し
過ちを赦^{アシタ}しあい分ちあい神様に懺悔もしました

今は愛し合う喜びと希望に胸躍らせて未来を待ち焦がれています
リンは明日あなたに逢いにゆきます リン

すべてでは天地の運びだね

アウ^{アウ}というは天地のアイ

明日ボクはキミを愛しそして無限に^{アシタ}すだらう

キミの右田に宿る怒りと悲しみはボクが引き受けるからね
キミは愛と慈しみ

それだけでいい レイ

私は神の導きに従いあなたにすべてを委ねます
レイ・私が甦るよつに神様に願いをかけてくれたのね

アイアワセ 紡ぐ双子の物語 永久の祈りに響く鈴音 リン

キミとボクは眞実の姿にたち返るんだ レイ

真つ青に澄み切つた空がわたしを送り出してくれました
陽射しがとても暖かいわ

神々様が天空に集われているよう

もうじきあなたの胸に還ります

小舟のような白い月があなたのもとへ運んでくれます リン

アイズは霧のベールに包まれていましたが今は暖かな陽射しが降り
ています

きっと暖かな風がキミを迎えることでしょう レイ

カサネアワセ 2006.12.13 水曜日

今回の人生でキミと初めて出逢つたのは8年前
僕達はそれ以前のお互いを知らなかつたのです
その日はお互いのフォトを見せあつた
まだ出逢う前のお互いの知らなかつた過去の時を埋めるために
それまでのキミとボクがどんなで何があつたかなどフォトを見ながら
話したね
離れていた幾千年の空白を埋めあわせ

過去から現在そして未来をひとつにあわせて

宇宙神の御胸に帰りアラタに生まれ直りますように

それからボクはキミを愛した

10時にキミと会つてからずっとキミを愛し続けた
時の空白を埋めるように・・・・・
そして僕達はキャッスルを後にした

リン

キミの素肌の感触がその昇りつめる切なさに洩れるキミの声が
エクスに悶えフルエルその姿

そのすべての余韻がボクをとらえてハナサナイ・・・・
カルマの余韻が消えるまではまだまだ切なさの味わいだね

レイ

エエ・本当に

私は17：03分の東京行きに乗りました

あなたとのアイの余韻が今も全身を包んでいます
今はラヴを聞きながらエピソードを読んでいます
三千年の時を紡いだあなたとわたしの物語
深く呼吸し神様へ感謝を捧げます

神よあなたの御心にその慈悲と慈愛に報いることが出来ますように・

この次に逢える時まで物語はどれくらい増えるのでしょうか
その日までしばしのお別れ・・・・

レイ

あなたの瞳が私の目に今も映っています リン

イエス様が生まれたクリスマスのような静かな夜
キミとボクは地球の天地にアレテ現われたのです
カルマの人類のうちには宇宙から見ると存在にはならないのですね
人間はアイとなつて初めて天地に現われたことになるのです
アルテシアというのはそういう意味

アは宇宙なる神をいいルは回転して現われる状態のこと
それは地上世界に肉体を持つことの意味でもあります
テは天の志を持つてシは司るということ
そしてアは神に還り神の働きとなるということ

宇宙のアイを現わすということです

メイシアのメは芽であり目

それは生まれ育まるという意味

イは人として現われた状態をいいシとアはボクと同じ意味です

レイ

あなたは智だから知と口を同る

そしてあなたとアイを現わして身に芽吹き
育てるのがメイシアの働きなのですね

リン

女性の心情は真情神情となります

それは祈りなのです

今のキミの心そのものです

キミは自分では気がついていないけれど
ボクの胸にはキミの祈りがこだまして
いる
アイはすべてを変えてゆく

14日の夜明けに目が覚めるとき

ボクは何度もキミを呼んでいた

レイ

キミがボクを呼ぶように・・・

あなたがわたしを心から慈しんでくださるから
その想いがわたしの中にアイの泉を生むのです
メールの少し前に目が覚めました
わたしの中には今もあなたが感じられます
いつもあなたが呼ぶ声が響いています
いつもあなたとともに リン

キミを抱いているとき

キミの眼は慈しみと感謝を湛えていた
溢れる涙は過去の嘆き悲しみ苦しみ傷みと出会いの喜びが湛えられ

ていた

キミの瞳の奥には祈りが響いている
どうして神様にお報いしようかと

ただひたすらに レイ

静かな夜明けを迎える

カルマのざわめきや怪しいものたちもなりを潜めていくようですが
あなたのいる東の空はメッセージボードになつているようです
昨日から私の右の田は軽く明るくなつたみたいで

リン

外は大粒の雨が音をたてて降つて

キミは素晴らしい

本当に素晴らしいよ

キミのような心で男性に擁かれる女性は今の世にはおさらへ存在しない

普通女性は男性に抱かれるとその身に感じる快感の渦に浸つてゆく
そしてオーガズムを迎える・・・

神は女性が男性を迎えるれば火が着くように肉体を創られた
でもこれは鈴を鳴らす為の導火線のようなもの

そこから先へはお互いに對しての尊びあい慕いあい
尽しあいがなければ入つては行けない世界なのです

世の男性方は女性のカラダに火がついてその悶える肢体を眺めてサ
ディスティックな感覚を駆り立てられてゆく

女性の反応を見て感じてその声を聞いて愉しんでいるんだね

そして女性はその甘美な性の快感の淵に漫つてゆく・・・

それは女性も男性も自分の満足を充実させる為に相手を利用することになります

そしてその行為による感覚をより強くより深くより激しく感じてゆくことを追求しているのです

以前のキミが男性に抵抗を感じて拒絶していたのは

その行為が侮りであり弄びであることを魂が感じていたからです
キミのように感受性の纖細な魂が拒絶反応を起こすのは当然だね
それでも初めのうちは物珍しさとお互いの利害が一致しているので
結構うまくいっているように見えます

男性も女性も自己の性的要求の満足と云う点ではお互いが必要だから
だがしかし

侮りを受け暴力を受けていることに違いないので
やがてのうちに心も体も耐えられなくなつてゆきます

男性が能動で女性は受動だから受けるほうがより被害を強く感じます
やがて女性は相手の男性に拒絶反応が出てきます

だから決して鈴鳴りの結びにはならないのです

キミはボクとの行為（性交）の間ずっとボクの目を見つめ心を見つ

めていた
その目にはあなたにアワセ報いたいと必死なほどに湛えられていた
祈りがあったのです

それからキミとボクの結びには無限の深さがある事に気がついたよね
ひとたび性を交すごとにキミのHクスの深さはかわつてゆく
鈴鳴りの結びにはこれぐらいというものはなく

その感じられる感覚にイキズマリはないのです

キミがボクに擁かれたときに感じたことは
慈しまれ尊ばれ慕われている

そんな感じでしう

傍目から見るとそう変わらない様に見えるかもしれないけれど

心のフルマイや体の感覚は目には映らないものだからね

レイ

神は何故人にカラダを与えてくだされたのかを考えていきました

リン

宇宙神は全知全能でおられるのだからもともとすべてを「存知」なのです

けれどわざわざ現われの宇宙世界を出現させて人をして無限創造へ導かれる

するとおやおや・・・以外な結果がでたりする

そしてその結果を受けとめて解き明かしてゆかれる

そして宇宙神は進化されご成長なさる

ぼくらの経験は神への貢ぎ物なのだね

宇宙神は僕達を通して御経験なさりご成長なさる
だから人は神の分靈ワケミミタマといつのです

レイ

アイが魂の結びならばカラダはいらないのではと思っていたのです
だつてカラダは魂の入れものでしょ

なぜオトコとオンナのカラダを作ったのかと考えながら眠りに着いていたら

あなたからのメールが・・・
わたしにもわかりました

この星の身と心でお互いを受け入れ受けとめイカシアウことが神から頂いたプレゼント
人のツトメなのですね

リン

2・4 ソラへの道 (REVIERA)

神の庭に建てられている八角形の建物
ガラス張りで窓には風に揺れる白縄のカーテン
部屋の中央に置かれた寝台
穏やかな慈しみの中でアイをかわしあつふたり
いつか見た夢はあなたとわたしでした
レイ

アステイとかアステイリアスという響きに覚えはありますか
神殿か泉を想いだすとその響きがあるのです
もうひとつは深夜のバスルームで心に浮かぶ映像
神様の子宮のような丸い透明な球体の中に赤ん坊がふたり
安らかで平安で満ちたりた世界にスヤスヤと眠つている
誕生を待つて いるのかしら・・・
それとも過去を想い出させて頂いたのかしら リン

ハは無限永遠をあらわす数です
アステイのアは宇宙なる神をいいスはその庭井を意味します
宇宙世界の真ん中のことです
13日のキミとボクはそこにいた
宇宙の真ん中の宮殿にいたのです
僕達は遙か遠い昔は別々に存在していたのです
そしてふたりは宇宙神の御胸に還りひとつになつた
そして分れてイミュエルに現われたのです
キミが見た神様の子宮はその時のことでしょう
ウテルス

神は人の目でみて耳で聴いてその肌で感じ
その心で受けとめておられます
人は宇宙なる神と繋がっているのです

まあ本当はひとつといつてもいいくらいのものなのですが・・・
ボクは幼い頃にこの世のありとあらゆる未知のイメージやら世
界は

すべて宇宙のどこかに現実に存在しているところに気がついた
のです

人はこの宇宙に在るものしか創造することはできないのです
そうでなければ人のイメージに現われてくる事はありません
それは宇宙なる神と人はひとつであり宇宙はひとつであるからな
です

人生は神様の創られた舞台で神様がステージとなり照明係やら舞台
係となり他の俳優女優となつて

神様の描いた台本のなかで役を演じているようなものです

台本はあってもアドリブは自由

成長進化に向かうのも自由

墮落後退するのも自由なのです

宇宙神は人に自由という尊厳を与えて下さっているのです
自由の尊厳とは本人の意思によってどのような人生をどのように演
じるのも自由ということなのです

どのような運命にもそれにはその理由があるのです

人の運命がどんなに理不尽なもののように見えても

万に一つのぐるりもなくその本人の望みによつて成り立つているの
です

運命に現われてくるすべての者・物や事々は生まれる前に自分が決
めたことです

それを生まれて肉体に宿る時に忘れてしまったような状態になつて
いるのです

じゃあ一生懸命に生きるのとなにもしないのでも同じ結果なのかと
いえばそうではありません

生まれる前に大体の事を決めてくるとします
しかし生まれてからの自分の想いとフルマイによって未来は変化してゆきます

瞬々刻々には未来を決めながら生きているようなもの
いすれにしても自分が決めて未来をあらわしていくことに違いはないのです

最初に決めた道からまつたくかけ離れてゆくこともあるのですが
大半はその道野辺に沿ってゆくものです
人は宇宙なる神の分靈身だから進化への努力は自らの意思によるものでなければなりません
言われてしたのでは成果は望めないです

たとえば夢の中で神様のお告げがあつたとします
あなたならそのお告げのとおりにするでしょうか
ボクならばそのお告げは話半分ぐらいに聞いておいて
そこから無限に思案を重ねてそれが何を意味するものか
それは宇宙の正しさの中にあるかどうかを探り当てるでしょう
もしもお告げのとおりに行動したとします
それがうまくいったときはいいのでしょうか
惨憺たる結果を招いた時にはどのように思つのでしょうか
やはりお告げをくれた神を恨むことでしよう
神のお告げであつてもそれは神の導きとは言い切れません
仮にそうでも人は自分が良しと思わない決意や行動はしないものです
だからよく考えてみますと結局のところそれも自分の望みなのです
神がそういうのだからそうなのだと安易に思つのは何気なさなのです
結果が良くても悪くても行つた結果はすべて自分が受けて責任を取ることになります

ですから人はよくよく思案して運命のすべては自分の責任と思い切つてゆかねばなりません

これは人にアドバイスされて行動した時にも同じことがいえます

運命に自らの責任のない結果は存在しないのです

世の中には靈能をもつて靈や神の声を聞くことができる方々がおられるようですが

そのような方々も同じ過ちに陥りやすいものです

例えばテレビのニュースだからといってそれを鵜呑みにしてよいものでしょうか

そこには偽装があるかもしない

虚飾があるかもしない

嘘があるかもしないのです

神や神靈といったからといってどんな存在かは人からはわからないのです

仮に真の神だとしても案外人を試されていたりするのです
だからすぐにパクリと呑む訳にはゆかないのです

人は宇宙の正しさから見極めることが必要なのです
宇宙の正しさを掴むには自らの人格を磨くこと

人格がすべてを見極め観ぬくのです

助けると救うとは似て異なるものです

救うというのは人の真の成長進化を祈り願いその必要をさしあげる
こと

それは使え尽くします

ですから運命とは神が下さったその人にとって必要不可欠な成長進化のための玉手箱なのです

神の人への仕え尽くしの相なのです

それは喜びも然り苦しみ悲しみ嘆きや傷みにしても同じです
ですから人がどんなに苦しんでいても

それは本人の成長進化の為の一ページであり

その人の望みの上で現われている成長のエキスなのです

ですから安易に助けたりしてはいけないです

助けたならその人の成長の腰を折ることになり神の「与えられた運命」という成長進化の糧を台無しにすることになるからです

人の運命は一度きりではありません

何十回何万回と繋がりその一つひとつに意味があり神の御計画があるのです

僕達にできることはその星と星の神の望みによつて

人が進化する為の必要を与えられたツトメの上で果たすこと

それがキミとボクの神（紙）芝居

僕達もキミとボクという存在になつていてる宇宙神のひとりなのだから

神様はあらゆるすべてをご存じなのです

何しろ紙芝居のおじさんだからね

人は幼いからは何もわからないかもしれない

でも成長とともにわかるつと

出来るようにならうと無限に努力をしなければならない

幼さが罪なのではなく

幼いままに成長しようとして自らの怠惰が罪なのです

宇宙なる神は500億年のジンセイ神生ジンセイでその偉業を成し遂げられる

すべての人が宇宙なる神そのものの偉大なる存在者となるその日ま

で レイ

なんて・・・

なんて大いなる神様のなさることは慈悲と慈愛に満ち溢れているの
でしよう

神様が授けられる恩愛にどのようにお報いしたらよいのでしょうか
気が遠くなるほどの壮大な大宇宙の嘗み

海の砂粒のようにちつぽけなこのわたしに何が出来るでしょうか

このところわたしのカラダは進化していくようですが
月のものが先程訪れました リン

先月から周期が少し早くなっている気がするけれど

レイ

そのようです

予測のつかない早さで

きっとコンナモノなのでしょう

リン

キミのカラダと地球の天位の変化が連動しているようです
動きが速くなっているのだね

リン

変革の時なので地球には僕達の他にも鈴を持つ人々が数多に存在しているようです

僕達の軌跡がその方々の道標となるよアマタ

ボクはエピソードを出版社に送つてみよつと思つてます

タイトルはトリプルズ

僕達が存在するこの宇宙の神はその創造に一度失敗しておられるのです

一度目は途中で宇宙全体が滅亡したのです

そして今も滅亡の比率とスピードは上がつて
だがもしも鈴持つ人々がその働きを成就したならば
宇宙の進化は劇的に変わつてゆくことになるはずです
急げ！と言われているような感じが背中を押してくるのです

レイ

レイ

とてもよいお考えだと思います
きっと神様の導きのもとに共鳴される人々がおられると言じます

リン

リン・・・
やっぱり投稿するのは止めよといつてます
このエピソードが世に出れば共鳴なさる方々はおられるでしょう
でも人は様々に思うもので
ボクはキミをもその想念の晒し物にしてしまって良いのだろうかと
考えていました レイ

毎年恒例の南こうせつさんのコンサートに行つてきました
以前とは違い楽しむことができない・・・
あなたが感じている危機感が波のように押し寄せるのです
コンサートの中でわたしは祈りました
この会場の中に居あわせた方に

一人でも銀の鈴を持つ方がおられますように
エピソードに共鳴してくださる方々がおられますように・・・
コンサートの間じゅうあなたの声が聴こえあなたの鼓動を全身に感じていたのです

愛しいレイ

どうかやめるなんて言わないで

銀の鈴が唄になり私の胸の内に響いてくるのです

私達の過去のすべてを

未来に伝えてゆくことこのアシトメだと信じます

大丈夫

あなたとならば

わたしたちはひとつなのですから リン

リン・キミもボクと同じ

もう贅となる覚悟は出来ていたのですね

キミとボクのすべてをこの天地に捧げ尽す

レイ

わたしは人混みが苦手です

出歩く時はラヴを聞いています

カルマの渦はわたしには重荷らしく

守護^{マスター}靈様が人込みでは目を閉じさせることが多くなりました

あなたの名前を呼びながら砂漠を彷徨う感覚はもうなくなりました
あなたの胸の中にいるみたいに陽射しがわたしを暖かく包んでくれ
ています

バスタイムはわたしの好きな時間
穢れを清め魂を休めている感じがします リン

水はミとス

ミズは宇宙なる神の現われたスガタそのままのものなのです
だからミズは魂とカラダを清めてくれるのです

沐浴や滝行などもそのような意味合いから行われているのでしょう

古事記ではイザナキイザナミの神が性をかわして神生み国生みをな
されました

イザナキのキは氣で宇宙神のチカラ

宇宙の力を誘うハタラキを示すのです

イザナミのミは身でありそのチカラを身に宿し生み育むということ
神生みはあらゆる物質と非物質を創り成したということ
国生みは島々を創り成したということなのです

すべての存在と働きを創り成す
神とは本来働きのことなのです

キミとボクはアイのフルマイで性をかわしあい

この世界に金の鈴鳴りを誘うのです

鳴り生り成りの鳴りは金の鈴生りを意味し

生りは生れるチカラ
成りは事の成立
成就をいつのです

人は靈止ルート

靈が止まりとどまると云つ意味です

神がウツシミの世界に現われた相スガタを人というのです
しかし人間という場合の間はそのアイダということ

まだ人に成りきれていないという意味

地球にアイのスガタが存在したなら地球の天位は変わり世界も変わ
るのです

現われの世界はそれから数千年をかけて

大いなる進化を遂げることになるのでしう

レイ

あなた

わたしは何度もメールを読み返しています
無限とも思える時を超えて出会えた奇跡

この身と心で鈴を鳴らし響き渡るように祈ります

危機は・・・またチャンスを生むことが出来るのでしうから

リン

リン

人の上に立つということ

人は神から頂いている尊厳を誤つて受けてしまうことが多いものです

それが自尊心となりプライドになるのです

人は知らずのうちに人の上に立つてゐるものです

人は人を助けるということや同情することがその人の上に立つて
いる事に気がつくでしょうか

人は自らの意思で宇宙からみた事の良し悪しを判断出来ねばなりま
せん

見ぬけぬ者はすでにカルマに取り憑かれそれに加担するも同じなのです

古事記にはイザナミの神がホノカグツチノカミをお生みなされたとき

ホト（花芯）を焼かれて黄泉の国へ行き

そこへイザナキの神が探しに行くと

イザナミは体が腐つてウジがわいていたという話があるのですが

それも原因は同じです

オトコとオナガが契りをムスブそのときに

オンナのその身はいわれなき心地におかれます

キミの心はボクと愛しあつたあの時に

どににあつてどう想い

どのように祈つていたでしょうか

キミは無意識にしていたのです

だからあの時に銀の鈴は微かながらにも響いたのです

そこをはつきりと掴みいつもいつでもフルマエルようにする

それがミヌクということなのです

レイ

わたしは事の善し悪しを見極めるといつどがわかつていないので
すね

自分の為ではなく神様の道をゆくことの真実を見極める千恵がまだ
足りないようです

あなたの哀しみが伝わってくるのに

未だに何もわからないのです

リン

キミがここを掴まなければイザナミの運命をゆく事になる

道は切り立った山の頂きを歩むが」とく

されど神の御裾を掴めば墮ちる」とはない

リン

ボクのメールを最初から読み直して“ごらん

今まで人類が陥つて来た根本の原因

キミはそれを知つてゐる筈です

初めて愛しあいひとつになつたあの時に

キミはボクの目を見つめ

湧き上るような想いを感じていたのだから

　　レイ

わたしは神様に祈りました

あなたとわたしがアイしあうこととで神様とひとつになりすべての存

在のお役に立ちますようにと

それ以上はわたしにはわからないのです

もう鈴の音は鳴らないのですか　　リン

人は性をかわすその時になにを感じてなにを思つているのだろうか

その違いを感じてごらん

その違いはどこにあつたのだろう

　　レイ

自分の欲望を思はず

愛する人にも求めないこと

わたしはあなたに幸せと喜びを願つていただけです

只ひたすらにあなたを愛し尽し

あなたのお役に立ちたかった

わたしは眞実のアイに生きようと血の意志で覚悟を決めたのに・・・

　　・
ごめんなさい・レイ　　リン

女性は性を交しているときに肉体感覚の悦びを感じてゆく

その時にどんな想いの淵に入つてゐるのだろうか　　レイ

アイは与えるのではなく求めもらえるものだと思つてゐる
相手を思いやるのではなく自分自身の想いを正しいことと考え方
をして

カラダの悦びに酔いしれてゆくのでしょうか
魂のムスピアイは神とひとつになりたいと心から願い
身も心もひとつとなりお互いを愛しむこと・・・ リン

愛する人に抱かれて得もいわれぬ心地になるのは
神が受けられた鈴鳴るワザへの誘い
女性はそれをどのように思い考えているのでしょうか

レイ

人はみな神様の為ではなく

自分の悦びの為と感じてゐるのでしょうか

自分自身が神様の子供

神様自身であるということを忘れて

人は真に愛する人と契る時に宇宙なる神様との誓いを思い出すのでは
ないでしょうか

アイを現わし天命を果たす約束のことを

銀の鈴はひとつでは鳴らない

鈴持つふたりの心とカラダ

その願いと命が結ばれて神様と結ばれた時に金の鈴が鳴るのでしょ
うか リン

そうだよ・リン

地球上始まって以来の人類の過ち

それは自己満足という世界

キミはワカヤギさんや他の男性方に抱かれていた時
何を感じ何に拒絕の心が起こったのだろう

自己満足は肉体感覚の要求と自尊心という想いが心地良くなる為に

相手も自分をもその為の道具にして使ってゆくのです
自分と相手がエクスターに達して快感を憶えてゆくところを見
て聞いて触れて感じて楽しむ為の道具にね
だから愛してるなんて言葉は相手を酔わせる呪文のようなもの
キミは自分が道具にされて犯されることが堪えられなかつた
それが上に立たれて蔑ろにされている感触なのです

キミとボクがひとつになつたときにキミは祈つていた

女性の肉体性の悦びの狭間で

それが使え尽くすという感触

神様どうしたらこの歎びにお報いすることができましょうかと

レイ

わたしは祈つていました

あなたにそして神様に報いるにはどうすればよいのか問つていきました
今のビジネスも金銭や物的環境への欲望をかきたてて
人を操り自己満足の心を煽るのですね

イザナミの神がホトを焼かれて黄泉の国で朽ちたのは

女の身におこる性的快感に酔い痴れたから・・・

すべては自己満足という宇宙の道に外れたフルマイからなのですね

リン

そうだよ・リン

ビジネスも自己満足ならば人の欲望を満足させる為に甘く綺麗な香
りと金銭財物で人々を誘い醉わせ利用することになる

そしてあらゆる国と民と金銭を手中に納める

そこに階級が生まれその頂点を皆が目指すようになつてゆく
でもその陰には泣く民が何倍も現われてくるのです

女性が自己の悦の世界に入るというのはそれと同じことなのです

それでイザナミはホトが焼けて黄泉の世界に入つてしまわれたのです

性の過ちを神話に暗示されているのです

リン

キミは本当になしがたいことをあの時に想っていたのです
キミとボクの場合それがあまりに自然で当たり前だから

キミはわからなかつたのだね

この宇宙では自己の満足の世界はある一定の時間と空間の拡張の後は必ず滅亡するのです

何故なら宇宙は正しさという神の絶対法則のもとに成り立つてゐるからなのです レイ

レイ・・・わたし・・・わたしは本当にあなたに
神様に報いることができるのでしょうか

アア レイ

わたしはあなたの足を引っ張つてはいなでしようか

リン

キミはこの宇宙に人類が何万年何億年過して來たと思うつかい
誰一人そこに陥らない人はいないので

それはイザナミの神だけではない事を歴史が証明してあまりあります

今キミは宇宙の真実の性を感知感得しようとしているんだ

今度ボクと結ばれるときにキミもはつきりと知るだらう

金の鈴の響く音とともに・・・・・

今夜はキミも疲れただらう

もうおやすみ

今夜はボクの左腕がマクラだよ レイ

ありがとう レイ

わたしを愛してください

あなたにお逢いしたい

今宵はあなたの左の腕をお借りします

おやすみなさい

愛しいあなた

リン

先程から外はサラサラと雪が舞い降りています
今年は遅めで今日がアイズの初雪のようです
キミの悟りへの祝福の雪でしょうか

今それが出来るということは

勉強して憶えて出来るのではないのです

生まれる前からすでに知つていて出来てている

そうでなければ出来るという状態にはならないのです

出来るのは現実にフルマウということ

それは吸つては吐く呼吸の如く当たり前で自然に

宇宙の理を解き明かしカルマを解き明かし

宇宙の意味意義価値を無限実行してゆく

それは復唱確認であり無限進化でもあります

キミはもう迷うこととは無いでしょう

レイ

はい・レイ

静かな喜びが胸にひろがります

出来るという事は生まれ持つての資質ですね

あなたの言葉がわたしの目を開かせてくれるのです

リン

最初に言つたはずさ

キミはすべてを知つているつて・・・

キミとボクは資質を備えた上でイリュールから降りたんだ

只地球の嘆き悲しみ苦しみ痛みを胸に刻み

この肉体と魂でフルマウことが必要だったのです

それは全知全能なる宇宙神がわざわざ形ある宇宙を創られて無限創造をなさると同じこと

全知全能なのだからしなくてわかりきつておられるのだけれど
実際にしてみるとあれあれ・・・といふことになるのです
シルとフルマウでは違うといふことなのです

あらゆる問題は進化の種

アイがすべてを創り還るのです

ボクはキミを愛する

キミはその愛に応えたいのに思つた様にはいかない

ボクはキミの望みにあわせてキミを導く

その時ボクに神の全知全能が現われキミを誘^{イザナ}つ

キミはボクにアイを憶えて感謝のオモイ^{イモイ}が湧き上がり神に祈る

ボクはそんなキミに愛しさを憶えてさらにキミを愛する

お互^{イハ}いへしている事はその背後の宇宙神にしている事なのです

それが神への仕え尽くし

フルマイと祈り

アイのスガタ(相)なのです

レイ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1421e/>

トリプラス エピソード 1

2010年10月28日08時17分発行